



コロナ禍のもとでの
「民医連介護・福祉の理念」
実践・取り組みレポート集



民医連の介護・福祉の理念



私たちは、民医連綱領を実現し、日本国憲法が輝く社会をつくるために、地域に生きる利用者に寄り添い、その生活の再生と創造、継続をめざし、「3つの視点」と「5つの目標」を掲げ、共同組織とともにとりくみます。

3つの視点

- 1 利用者のおかれている実態と生活要求から出発します
- 2 利用者と介護者、専門職、地域との共同のいとなみの視点をつらぬきます
- 3 利用者の生活と権利を守るために実践し、ともにたたかいます

5つの目標

- 1 (無差別・平等の追求)
人が人であることの尊厳と人権を何よりも大切にし、それを守り抜く無差別・平等の介護・福祉をすすめます
- 2 (個別性の追求)
自己決定にもとづき、生活史をふまえたその人らしさを尊重する介護・福祉を実践します
- 3 (総合性の追求)
生活を総合的にとらえ、ささえる介護・福祉を実践します
- 4 (専門性と科学性の追求)
安全・安心を追求し、専門性と科学的な根拠をもつ質の高い介護・福祉を実践します
- 5 (まちづくりの追求)
地域に根ざし、連携をひろげ、誰もが健康で、最後まで安心して住み続けられるまちづくりをすすめます

2012年12月14日
全日本民主医療機関連合会 第40期 第11回理事会

実践レポート集発行にあたって

介護の魅力を発信しよう

教訓から学び合おう

先進的な取り組みを共有しよう

認め合い・高め合い・支え合える
関係をつくろう

理念を基に民医連介護の実践を拡
げよう

共に育ちあえる職能集団になろう



第44期 介護職部会代表者会議より

全日本民医連 介護職委員会委員長 門脇 めぐみ

第44期に入った途端、新型コロナウイルス感染症が全世界にまん延し、パンデミックとなりました。

感染者が爆発的に拡大した時、施設での留め置き、原則自宅療養など、医療を受ける権利さえも奪われ、助かるいのちを助けることのできない、いのちの選別が行われました。社会保障の脆弱さと、公的支援の不足は、高齢者だけでなく、全世代へ影響しました。

その様な中、声をあげずにはいられない、多くの民医連介護事業所では、介護現場の生の声を発信することで、介護サービスはライフラインであり、介護職はエッセンシャルワーカーであると認識されるようになりました。

密着が避けられない介護現場では、感染しない・させない対応を求められ、緊張や不安を抱えながらも利用者さんの日常を守るために奮闘してきました。

今回の取り組み事例集は、コロナ禍でも、ブレることなく、民医連介護・福祉の理念（3つの視点と5つの目標）を基にした民医連らしい介護実践がたくさん詰まっています。また、困難な状況から、新しい生活様式を意識し、前進した取り組みもありました。

全国の仲間の取り組みを励みに、介護職のやりがいや民医連介護職の使命を再確認する機会としていただき、全国の民医連介護職が元気になり、確信を持った実践に繋がることを願っています。



目次

○ 「コロナ禍による老健施設でのACPの実践と課題について」(北海道) ······	P.7
○ 「コロナ禍でのレクリエーションの取り組み」(青森) ······	P.8
○ 「コロナ禍での入居者様へのプレゼント」(山形) ······	P.9
○ 「コロナ禍での新たな介護活動交流集会の開催」 ～距離は取っていても心は近くに～ (埼玉) ······	P.10
○ 「コロナ禍に負けないデイサービス運営」(千葉) ······	P.11
○ 「コロナ病棟での私たちの取り組み」(東京) ······	P.12
○ 「非日常でのサポート力」(東京) ······	P.13
○ 「日々の継続することの大切さ。(目に見えて感じたこと)」(東京) ······	P.14
○ 「コロナ禍でも変わらぬ姿を支える」(東京) ······	P.16
○ 「特別養護老人ホーム入所前に叶えた願い」(東京) ······	P.17
○ コロナ禍で地域交流を図る「いるか保育園との交流」(東京) ······	P.19
○ 「近隣施設がクラスターのため閉鎖し、当デイサービスにて利用者様を受け入れた ケースについて」(神奈川) ······	P.20
○ 「事業所として入居者・利用者に寄り添う援助の取り組み」(新潟) ······	P.22
○ 「コロナ禍で頑張ってきた事例」(石川) ······	P.23
○ 「コロナ禍での歯科との連携の「看取りケア」 ～これまでの歯科衛生士との関わりを活かして～ (石川) ······	P.24
○ 「新型コロナウイルス感染症始まりの混乱の中でのデイサービスほやね城北での 取り組み」(石川) ······	P.26
○ 「みんなで学ぶ ～えがおの架け橋～ 福井民医連介護職集団の取り組み」(福井) ·····	P.28
○ 「同居家族の陽性により濃厚接触者となった利用者への対応」(山梨) ······	P.30
○ 「安心して利用できる憩いの場の提供」(長野) ······	P.32
○ 「サービスを止めないため、事業所クラスター阻止に向けて」(静岡) ······	P.34
○ 「介護がほんとうに好きだから」～やりがい事例集への取り組み～ (愛知) ······	P.35
○ 「コロナ禍で職員・利用者を守る取り組み」、「コロナ禍で利用者満足度を上げる工夫」(三重)	P.37
○ 「デイサービスでクラスター発生、営業再開後の現状」(滋賀) ······	P.38

○「コロナ禍で看取り期の面会を考える」（京都）	P.39
○「新型コロナ感染により在宅生活が困難となり緊急入所・ショートステイを受け入れた2事例」（大阪）	P.40
○「コロナ禍でも活動的に！仲間づくりを！！」（兵庫）	P.41
○「家族の一員として、一緒に支える終末期在宅介護」（奈良）	P.42
○「終末期における家族の思いに寄り添う」（島根）	P.44
○「当たり前の生活を」（岡山）	P.45
○「利用者さんに笑顔になってもらいたい!!」（広島）	P.46
○「自宅で家族と一緒に」～コロナ禍での最期の時間～（広島）	P.47
○「医療との連携でコロナ禍での不安に対応」（山口）	P.48
○「面会制限による家族の不安を軽減させるために」（福岡・佐賀）	P.49
○「コロナ禍で入居者とご家族の関り」（熊本）	P.50
○「コロナ禍で工夫した介護老人保健施設での施設内行事の取り組み」（鹿児島）	P.51
○「地域の通所事業所における新型コロナ感染症発生時におけるケアマネジメント」（鹿児島）	P.52
○「困ったときこそ訪問介護！」～利用者の生活と権利を守るために～（鹿児島）	P.53

「コロナ禍による老健施設でのACPの実践と課題について」

医療法人十勝勤労者医療協会 本田 雅和

【キーワード】老健施設 / ACP / 終末期ケア

2012年より老健施設で「看取りの指針」を作成し、看取りケアの取り組みを積み重ねてきた。今年度は、ACPの学習を課題とし、概念やプロセスを学び、他職種との情報共有を意識的に実施し、老健でACPを実践するうえでの課題が見えた。

Aさんは90歳でアルツハイマー型認知症があり、自宅で失禁や転倒が増え、レスパイト目的で老健入所される。入所時のリスク説明では、緊急時は延命措置を希望せず、老健で看取りの対応を確認している。老健入所後に体調の変化がみられ、尿路感染症や血尿の頻度が増え、泌尿器科に受診し、膀胱がんを指摘される。施設医より、ご家族へ、インフォームドコンセントを実施。積極的な治療は希望せず、施設で経過をみる意向を確認した。その後、ADLの低下や傾眠傾向となり、内服の減薬やリクライニング車椅子へ変更を行った。食事も徐々に経口から摂取できなくなり、ご家族に意向を確認すると、胃ろう造設は行わないこと、点滴は相談しながら状況に合わせて実施することを確認した。1ヶ月後、さらに経口摂取の低下がみられ、ご家族とインフォームドコンセントを実施し、延命措置を望まないことを確認。施設での看取り対応に同意を頂き、食事については、食べられる分だけ、点滴は1日500ml程度までとし、抹消の血管確保が難しくなった場合は中止することを確認した。また、ご家族の希望として遠方に住んでいる息子さんにも最期に合わせたいと希望を確認した。管理栄養士等の他職種を含めてカンファレンスを実施し、アイス等の無理のない範囲内で経口摂取を続け、昔のアルバムや好きなキャラクターのぬいぐるみを活用して、日常の会話や本人の反応を引き出す関わりを持つことができた。また、看取りでは息子さんに見守られながら、静かに永眠された。

コロナ禍のため、個室を使用して面会の機会を確保し、最期の時間をご家族と共有することができた。A氏は認知症により意思決定が困難であったが、日々の変化から快・不快の感情をキャッチし、安楽な姿勢や食事の提供、介助方法についてチームで共有・実践してきた。ACPは特別なことではなく、普段から利用者との関わりの中で既に実践できている部分があることに気づいた。最もその人らしさが現れるのは日常生活の中であり、身近に接する介護職は日々の生活援助を通して対象者を最も理解できる立場である。介護職が主導して、日々の変化をカンファレンスで情報交換することにより、他職種含め対象者への理解が深まり「無理のない範囲で好物を口にできること、苦痛のない状態で穏やかに過ごせること」をケア目標にチーム全体で生活を支えることができた。

利用者と最も身近に接する介護職の役割は重要である。今後老健でACPを実践するうえで、本人の価値観や今後の生活への意向を確認し、ACPを取り入れた個別性のあるケア計画の展開へつなげていくことが課題である。積み重ねた最期の時をご家族と共有できるように環境を整備し、感染予防の徹底とクラスター化しないための対策も同時にすすめながら日々の介護活動を実践していくことが重要である。

「コロナ禍でのレクリエーションの取り組み」

青森保健生活協同組合 石塚 理仁

【キーワード】レクリエーション / 季節感 / 平等

例年であれば、春にはさくら祭り、夏には夏祭り、秋には味覚狩りなどを実施しているが、コロナの影響により祭りごとや、屋外への外出も感染リスクがあるため中止となった。外出レクリエーションを別な形で楽しむことができないか職員でカンファレンスを開催し、実践した事例を報告する。

検討したレクリエーションとして、事業所近くの川沿いにあるさくら鑑賞や、送迎時に桜並木沿いを通るなど季節感を感じるような外出を行った。観光農園からブドウを購入し、職員の家族が育てる椎茸を事業所内で味わえる取り組みを実施した。

季節を取り入れた行事を継続することで、四季を感じることができ、事業所近くの屋外へ外出することで、歩行訓練やコロナ禍で沈んだ気分の向上にもつながった。

これまで身体上や経済的な理由により参加できなかつた方も他の利用者同様にレクリエーションに参加し、味覚を味わうことができたことで民医連の平等を考える機会となつた。

「コロナ禍での入居者様へのプレゼント」

医療法人社団健友会 阿部 早希

【キーワード】 楽しみ / できる事 / コロナ禍

コロナ禍でご家族との面会制限等がある中で、日常生活の中に楽しみを生み出す事は出来ないかと検討し、地元の老舗フランス料理レストランの出張サービスを活用した事例とコロナ禍において初めての看取りとなったケースの振り返りを行い、コロナ禍でもご家族との関係を大切にしながら看取りを行ったケースについて報告する。

地元の老舗レストランの出張サービスを企画していたが、地域の感染状況悪化にて延長となった。しかし、入居者様にコロナ禍の中でも楽しみを感じて頂きたいとの思いから、感染に配慮して開催となった。フランス料理のフルコースの食事会ということもあり、ご家族にお知らせすると、当日着用出来るようにと洋服を持参されたり、「若い頃に行ったことがあるよ」、「ネクタイとジャケット、何年ぶりに着るよ」等、入居者様も何を着るのかを考えたり、日常生活の中で入居者様と職員はもちろん、入居者様同士の会話が増えるなど、楽しみにしている様子が伺えた。

当日はレストランで出されているフルコースのメニューが提供され、普段提供している食事形態と同じ形態で召し上がって頂けるようにシェフの方と何度も打ち合わせを行った。また、雰囲気作りも重要で、レストランで使用しているテーブルクロスが敷かれ、レストランのサービススタッフより料理が配膳されると、最初は緊張されている様子も見られたが、徐々に和やかな雰囲気となり、ナイフ、フォークを使って楽しい食事会になった。

コロナ禍において初めての看取りとなる入居者様がおり、コロナ発生前は当たり前に行えていたご家族との面会が、簡単に行えなくなった今、最期の時を少しでもご家族と一緒に過ごして頂けるように検討した。1度の面会での時間・人数制限、居室内の換気を行いながら、入居者様の状態に合わせて面会時間も延ばしご家族だけで過ごして頂いた。少しずつ最期の時を迎える入居者様に間近にお会いする事が出来て、ご家族から「顔を見る事が出来て良かった」との声が聞かれた。

コロナ禍で我慢・制限が続く日常の中でも、入居者様・ご家族様にとって少しでも心安らかに過ごして頂けるように最良の支援を検討し、その都度実施する事ができた。コロナ禍だから「出来ない」ではなく、コロナ禍だからこそ「出来る事」「今までとは違う発想」を常に模索しながら日常生活の支援を行えるようにしたい。

コロナ禍であっても、全てに制限し、気持ちまでもが縮小するのではなく、状況を判断し感染対策をしっかりと行いながら、利用者・ご家族・職員の笑顔を引き出すために、できる事は何かを考え、寄り添い支援していく事の大切さを改めて感じた。

「コロナ禍での新たな介護活動交流集会の開催」

～距離は取っていても心は近くに～

医療生協さいたま生活協同組合 森高 義之

【キーワード】他職種との学び合い / 専門性の追求 / 介護職部会の活動

コロナ禍でも学び合い、育ちあう場を失うことなく、それぞれのフィールドで働く職員の役割と専門性を共有し、「未来を創る介護と医療」の実現に向け、「変化をのりこえ夢中になれる生活づくりをささえよう」をテーマに介護職のみならず、他職種からの報告を踏まえ、介護活動交流集会を開催した。

2019年度はコロナの影響により、交流集会開催日直前に中止になった経緯があり、「2020年度はコロナ禍でも交流集会を開催したい！」と、委員会メンバーの熱い思いを胸に、感染リスクを考えながら、どうしたら安全に行えるかの議論を重ねた。例年であれば、1会場で開催していた方法ではなく、3密を避け、会場を地域別に3カ所に分散させて開催を実施。参加者全員のマスクの着用、座席の間隔を1つずつ空け、参加人数も制限するなどの感染対策を実施した。参加者は、例年の半分の人数となったが、北部25名、西部29名、中南部45名、演題数は合計53演題（介護職28演題、看護師5演題、理学療法士6演題、作業療法士1演題、介護支援専門員7演題、歯科衛生士2演題、社会福祉士3演題、調理師1演題）の報告があり、コロナ禍でも感染者を出すことなく開催する事ができ、各事業者の実践内容を交流することができた。

演題報告に歯科事業者から介護職員と連携した報告があり、口腔機能向上について他職種連携の大切さを共有することができた。

医療生協さいたまで3年前から取り組んでいる「生協10の基本ケア」の実践報告が多く挙げられ、3年間の成果が形になってきたことを実感した。

3密を避けるために会場を3カ所に分けることになったが、「人と人との直接的な距離は取っていても医療生協さいたまの職員同士、心の距離は近くにありたい」という実行委員会メンバーの想いがあつて、リモートでの開催という新たなスタイルで実施することができた。

コロナ禍でも、質の低下に繋がらないように、交流会を開催することでケアの実践を報告しあい、学ぶ機会を設け、介護の質、専門性について深めることができた。

「未来を創る介護と医療」～変化をのりこえ夢中になれる生活づくりを支えよう～

第12回 介護活動交流集会 NEWS⑥

2020年度介護活動交流集会実行委員会

2021/3/6(土) 実行委員長の挨拶、新入職員紹介をZoomで共有し、その後、3つの地域にて開催いたしました。Zoomの運用や地域ごとの開催は初めてでしたが、各地域において日ごろの取り組みを深めることができました。演題数は53演題、感染への対策を考慮し参加者は制限して例年の半分である108名の参加でした。特に「生協10の基本ケア」のとり組み報告が多く多く、内容が伺える内容でした。また、歯科と施設との連携も重視し、歯科から2演題の報告をいただきました。



座長、助言者、参加者の皆さま、ご協力ありがとうございました。

◆北部：行田グリーンアリーナ 参加者25名 要員4名



実行委員会の連絡ミスにより、急遽、栗原統括に座長をお願いしました。栗原統括、ご対応いただきありがとうございました。看取り、グリーフケアの報告時に、会場のあちらこちらですすり泣き声が聞こえました。いのちと向き合い何をすべきか、職員一人ひとりの日常の鬱陶や責任感を参加者が恥みしめて自然発生しておりました。会場全員で感動を共有できた素晴らしい事例報告でした。

田中 圭輔（実行委員）

◆西部：埼玉西協同病院 参加者29名 要員5名

分散会場は初めての試みでしたが、順調に進み大きなトラブルもなく、ひとえに会場設備等ご尽力いただいたスタッフの方々のおかげだと思います。地域ケア、また医療ニーズに関する学び、手立て等新たな学びをさせてもらいました。事例に関する問答も積極的に行われ充実した交流会でした。参加してくださった方々、ありがとうございました。

坂義信（実行委員）



◆中南部：ふれあい会館(2会場) 参加者：40名 要員5名



あらかじめ委員会が参加者を割りり、2会場に分かれて開催ましたが、「他の会場の報告も聞きたかった」という声を多くいただきました。

今年度は初めて生協歯科の職員も参加していただきました。生協10のケア、ターミナル加算、クロイツフェルト・ヤコブ病の取り扱いなど演題内容は幅広く、参加できて良かった！職場で活用してみたい！

刺激になった！などの声をたくさんいただきました。

間根香澄（実行委員）

2020年度 介護活動交流集会実行委員会 実行委員長：武藤（熊谷伊） 実行委員：森田（老健みゆき） 岩田（翁火） 田中（熊谷） 吉川（さんとも） 中村（うらし） 間根（深谷） 伊東（かかわゆ） 坂（ひじり野） 関根（D5）

「コロナ禍に負けないデイサービス運営」

社会医療法人社団千葉県勤労者医療協会 飯野 沢子

【キーワード】経営改善 / 職場づくり / 地域連携

船橋市南部地域にある南浜デイサービスセンターは南浜診療所グループとして介護保険施行時に開設された。当事業所はデイサービス激戦区内にあり、2018年頃より、地域のニーズに対応できず、経営が低迷していた。経営の低迷に危機感をおぼえ、コロナ禍に負けずに根本的な運営の転換が必要と考え、地域リサーチを重ね、この地域のニーズに応えられる事業所として、通いやすい、過ごしやすい、「ちょうど良いデイサービス」を目指すことになり、サービス提供時間短縮変更と職場作りをすすめた。その結果、コロナ禍にも関わらず、利用者件数前年比130%、年間600万円以上の収益増となり、経営改善に繋がった。その取り組みを報告する。

取り組みとして地域の調査を実施。地域の状況として通常型、短時間運動型、地域密着型、認知症対応型、通所リハ等、特徴のある施設が多数あることが明らかとなり、地域ニーズでは、自宅に入浴設備がない、医療処置の希望、体力に自信がない、運動したい、退院直後の受け皿などが挙げられた。

サービス提供時間を9:30～16:30(7・8時間)から2020年10月より9:45～15:15(5・6時間)に変更し、2021年4月から入浴介助加算Ⅱ、個別機能訓練加算Ⅰイ、口腔機能向上加算の取得を開始した。

職場作りでは、整理整頓、利用者の安全確保、職員の動線変更を行い、業務改善では、見直しの簡素化、マニュアル作成、カンファレンスの強化、基礎学習では、接遇、認知症の対応、感染対策について学び直すことを実施。個別ケア、個別リハの充実、室内でも楽しめる季節プログラム開催し、満足度アップを図った。

コロナの対応では、近隣事業所でクラスター発生がしたため、速やかに情報共有し、即時受け入れを実施した。その後も口コミで2名受け入れを行い、クラスター収束後も当事業所を気に入り継続利用している。

サービス提供時間を短縮したことでの「ちょうど良いデイサービス」を実現し特徴を打ち出した。又、すべての相談、依頼に対し寄り添い、できることを考え、私たちらしく受け入れ続けた結果、地域の受け皿となり、地域に選ばれる事業所、地域ニーズに応えられる事業所へと転換できた。コロナ禍、運営の転換に不安もあったが、県連、同グループ診療所、友の会、地域の方の力を借りて大きな目標（アクションプラン）を立て、感染対策と並行して経営改善に向けて行動を起こすことができた。今後も地域リサーチ、実態把握に努め、地域に根ざしたデイサービス運営をすすめたい。

住み慣れた地域で安心して暮らし続けるため、地域の要望に応えること、質の高い介護の提供をすることが深められた。



「コロナ病棟での私たちの取り組み」

社会医療法人社団健生会 原野 建二

【キーワード】閉鎖的 / 四季 / 多職種協働

【はじめに】

コロナに感染した患者は未知のウイルスで自身がどうなるか分からず不安のなか入院生活を送っている。またコロナ病棟と言う閉鎖的な空間で日々を過ごしていた。

【事例】

患者の不安を少しでも軽減できないかと思い、病棟スタッフで四季を感じられる飾り付けすることを考え、折り紙や厚紙などで、病棟の壁に四季に合わせた飾りを飾ることにした。クリスマスや正月飾り、春には桜の木を作り、花びらに患者さんの思いや願いを書いて花を咲かせる飾りを作成した。



【まとめ】

桜に願いを書いてもらうことで患者さんの思いが伝わってきた。悲観的な事は無く、「命を救って頂きありがとうございました」、「皆さんのお笑顔に感謝」等、感謝の言葉を頂いた。退院時には患者さんが笑顔で閉鎖的なコロナ病棟を後にし、病棟スタッフ皆で取り組んで良かったと感じた。



「非日常でのサポート力」

社会福祉法人すこやか福祉会 篠田 幸子

【キーワード】安全な外出 / 感染対策 / ご家族の介護負担軽減

【はじめに】

私たちは「コロナ禍での日常生活と外出援助」をどのように支援したら良いか考えました。2020年4月に緊急事態宣言が発令され、私たちの生活は大きく変わっていきました。スーパーに入ると人数制限が行われて、いつも利用している公園などの公共の施設飲食店が閉鎖、楽しみにしていたライブや旅行の制限 電車に乗って職場に向かう人も減り、在宅ワークが増え、外出する機会も減り、マスクは必需品になりました。この1年で変化や制限がありながらも、新たな習慣が日常になりました。

これからご紹介する利用者様も緊急事態宣言前は決まった日にち、決まった時間に外出をしていました。コロナ禍でも以前のように安心して外出できるような支援を実現したい。そのために感染対策を行いながら、どの様に安全な外出が出来るか考え実施いたしました。

【倫理的配慮】

抄録の記述内容でご利用者が特定できないように十分配慮し、掲載の承諾を得ました。

【事例紹介】

Aさんは46歳でダウン症・橋本病・視力低下(左目 白内障中程度)もやもや病(H29.8 通院終了)の持病があり、高齢のご両親との生活を送っている。

【経過】一部紹介

① 毎週日曜日は大型商業施設へ出掛け、軽食を召し上がっていったが、新型コロナウイルス感染予防の為、時間や場所が制限された。

② 通所が自粛等になり、高齢のお母様の介助負

担が増えていく。

③ 目が見えにくいことや耳が聞こえづらい様子があり、移動介助に注意が必要になってきた。また、コロナワクチン接種を受け、副反応が出てしまった。

【結果】一部紹介

① 人を避けて公園へ出掛けたり、時間制限で自宅マンション敷地内のカフェを利用している。

② 通所の自粛中は、当方午前中2時間ケアで介入し、お母様ご自身の時間を持つことが出来た。

③ 車椅子介助となり、自宅では手引き歩行や肩を叩いて声掛けした。補聴器を手配し使用している。

【考察】

以前のように外出ができなくなってしまったが、短時間でも外出させたいご両親の気持ちを考慮した上で、ご本人様の外出したい気持ちや他者との関わりを持ちたいという気持ちを尊重することができた。コロナ禍での安全・安心を心掛け、高齢であるご両親の介護負担の軽減を図り、将来について考えられるようにこれからも関わりをもっていきます。

コロナウイルス感染で緊急事態宣言を受け、支援が制限されてしまったが、民医連の原点である「その人の生きるを支える」人権と命を守り一緒に考えながら現場や地域で困っている事実に目を向け、耳を傾けてこれからも寄り添える介護を深めることができます。

「日々の継続することの大切さ。(目に見えて感じたこと)」

社会福祉法人すこやか福祉会 二宮 靖明

【キーワード】生活の中での見直しと改善 / 入居者にとっての楽しみ / 日常生活の変化

【はじめに】

昨今のコロナウイルス感染拡大の問題に伴い、日常的に行えていた入居者の買い物や散歩に行く事が出来なくなってしまった。そのため施設内だけの生活空間となり、入居者にとっての楽しみが減ってしまった。法人理念、事業所の方針でもある入居者が笑顔で元気に生活を送って頂けるよう新たな取り組みと、生活の中での見直しと改善点、買い物や散歩に代わる『入居者にとっての楽しみ』について報告する。

【倫理的配慮】

事例作成に当たり特定の利用者を取り上げての物ではなく全体を通しての物になるため個人情報の観点から利用者氏名を匿名とし、事例対象者が特定できないように配慮する。

【事例紹介】

日常生活のなかの①水分摂取量の改善、②靴を履かない生活、足の体操による血流の改善、③今年の4月より取り入れた入居者様の食事の楽しみとして『出前デー』による精神的な改善についての事例を報告する。

【経過】

①水分摂取量の改善について、1人1日1200ml以上の水分摂取を目指していたが、人によりまばらで、特に自力の方の水分量が少なく、日により1日850~1200mlであった。水分量が少ない入居者に対して、水分量アップの声かけを行い、10時や15時の水分量アップ、日中の水分量の確認、水分をこまめに摂取するようにした。

②床にジョイントマットを敷き靴下を脱いで、

手で触れる事で血流を良くし、毎日靴を履かない生活に変更。

③買い物、散歩、家族との外出(外食)ができる事で楽しみが減り、「出られないのなら美味しい物が食べたいわ」との声が多くなった1カ月に1回『出前デー』に取り組み、食による楽しみが入居者の中で増えている。

【結果】

①職員の中で水分摂取への意識づけができ、入居者一人ひとりの水分量もアップした。特に水分量の少なかった方を夕食前までにピックアップし、夕食時でも水分を多めに提供するよう心掛け、1日トータル水分量1200ml以上を達成できた。今年は発熱者や脱水症状になる方はいなかった。

②マットに直接座れる方は足を伸ばし、折りたたみテーブルに変更することで広い空間で横になり身体を伸ばす事が出来ている。

③毎月の出前デーが定着し、普段の手作りでは出せないメニューを楽しみにされ、食事の時の会話もはずんでいる。

【考察】

①夜勤の申し送り時に水分量の確認を行うことで、水分摂取が少ない方への促しができるようになった。

②職員が足に触れる事で血流をよくし、浮腫みの予防につながっている。

③入居者の思い出の料理もあり、「あそこのお店まだやっているかしら」、「あの味がいいのよ」と入居者同士での会話や昔の思い出話にもつながり、1つの楽しみとして浸透している。

長期のコロナ感染拡大の問題に伴い、入居者の日常的に行えていたことに支障が生じた。また、入居者にとって行動の制限された施設内での生活の中での楽しみは食事が一番であった。民医連の理念にもある利用者の生活と権利を守るために取り組みを実践した。昔からよく食べていた入居者の思い出の料理や、生活史をふまえたその人らしさにも触れる事ができ、生活を総合的にとらえ、ささえる介護が大切であるという理解を深めた。

「コロナ禍でも変わらぬ姿を支える」

社会福祉法人すこやか福祉会 伊坂 光弘

【キーワード】その人らしく / 感染対策 / 行動し免疫力を高める

【はじめに】

デイサービスセンターすこやかでは、すこやか福祉会の理念である命と人権を何よりも大切にし、介護サービスの提供にあたって安全に努め、その人らしく生きていくことを支援します。

【倫理的配慮】

事例研究に当たり個人の特定が出来ないよう匿名化し、この情報は利用者（患者）へのよりよい対応の為にのみ使用する旨を患者・家族に説明し同意を得ました。

【事例紹介】

デイサービスセンターすこやかでは利用者様に積極的に動いていただきます。レクリエーション活動はもちろん、洗濯物干しやタオル畳。そして昼食の配膳・下膳もやって頂いています。一時期、新型コロナウイルスの感染予防を考慮して利用者様の行動を抑制する考えもありましたが、職員も利用者様も一丸となって手洗い消毒・換気といった感染対策を徹底して日常生活を維持することを実現しました。

【経過】

新型コロナウイルスの市中感染により、利用を控える利用者様もいるなか、「デイすこやかが楽しい」、「役割を持った仕事をしたい」、「来ることで役に立てるのが嬉しい」といった利用者様からの声が聞かれました。そこで職員・利用者共に今までのデイすこやかの雰囲気や行ってきた生活の一部を維持すべく、感染対策を徹底しました。そして利用者様が主体的に動くデイすこやからしさを継続することが出来ました。

【結果】

7月31日にショートステイ利用前検査にて利用者1名様から新型コロナウイルスの陽性反応が、発見されました。しかしその後の職員、利用者様のPCR検査では全員が陰性となりました。今迄の感染対策の効果を実感したのと同時に、感染対策を行って利用者様の日常、デイすこやかの雰囲気を変えずに支援出来ていたことを誇らしく思いました。

【考察】

コロナ禍で「その人らしく生きる」ことを支援することは本当に大変です。感染対策を優先するがゆえに利用者様本位のサービスが行なえないのでは本末転倒です。利用者様の意向に寄り添い、実現に向け努力すること。またその礎となる職員のモチベーションも大切であることを学びました。

感染対策を優先して利用者様の行動を制限することは簡単です。しかしそれは医療の理念からなる視点の一つである「利用者のおかげでいる実態と生活要求から出発」に反し、目標である自己決定にもとづき、生活史をふまえたその人らしさを尊重する介護・福祉の実践を逸脱してしまいます。100%リスクを回避することは困難ですが、これに向けての努力を怠らず、コロナ禍でも生活を総合的にとらえ、ささえる介護が大切であるとの理解を深めました。

「特別養護老人ホーム入所前に叶えた願い」

医療法人財団健和会 筱嶋 明彦

【キーワード】住み慣れた場所で暮らしたい / いきつけのお店 / 特養入所迫る

【はじめに】

まいほーむ墨田は、墨田区全域を対象とした看護小規模多機能型居宅介護の事業所である。今回取り上げたのは、住み慣れた場所で暮らしたい、そんな思いを持つ利用者様の1年2ヶ月間の在宅生活継続への支援を行った事例を報告する。

【事例】

À 氏は60代で要介護5、II型糖尿病、網膜色素変性症、脊柱管狭窄症の既往歴があり、実家跡地に兄が建てたアパートの1階で独居、同じ地域で60年以上生活している。

令和2年4月、区内病院より相談あり。大腸癌オペ後に在宅復帰予定であるが、入院中にADL、視力の低下、退院後も癌の化学療法を行なうため、3週間に一度1週間の入院が必要であることから、看護と連携ができ、包括的にケアに当たれる当事業所を希望され利用となった。

【経過】

退院時は、尿Ba留置、オムツ使用、腰の痛みが強く移乗は介助、移動は車椅子という状態。独居生活を送るには毎日の介入が必要と判断し、週3日の通所と週4日の訪問介護（昼・夕）を行う事でサービスを開始した。

在宅生活の環境整えて順調なスタートと思っていたところ、利用開始からわずか1ヶ月で尿路感染症にて入院。さらに入院中に胆管結石が見つかり2ヶ月の入院。無事に退院して在宅復帰再スタート。ここで思わぬことが起きた。入院中に腰の痛みが軽減して少し歩けるようになった。「車椅子で玄関を出るのが大変ならアパートの外まで歩きましょうか?」とご本人より。「最近便が出る直前

ですけど、なんとなくわかるんですよね」それってオムツやめてポータブルトイレでいけるんじやないか?はい、いけました。めざましい回復力!利用開始から8ヶ月目の癌治療入院時に尿Baも抜去され退院された。

特養の申し込み結果もA判定待機1番。特養入所が迫ってきた。Àさんが日頃職員によく言っていたことがある。「若い頃から近所の喫茶店に良く通っていたんです。あそこのナポリタンまた食べたいなあ」コロナ禍ではあるが、入所前にADLは向上し、癌の再発もなく安定した在宅生活が送れるようになってきた。

10ヶ月を過ぎたころ、ご家族から近所の特養に申請の希望あり、Aさんの願いを叶えてあげたい。まいほーむ墨田、動きます。すぐにお店を下調べしたところ、現在も営業されていることがわかつた。入所まであと数日。Àさんをお連れして喫茶店に向かった。

お店の方はÀさんのことを覚えていてくれた。Àさんは体調を崩して来れなかつたが、もうすぐ特養に入所するので、その前に来たかたんだとお店の方にお話しされていた。ナポリタンとアイスコーヒーを注文、美味しそうに召し上がり、「最後に来れて良かったです。ありがとうございます。もう来れないから…さようなら。さようなら」とお店の方にさようならを二回言った姿が印象的であった。

【まとめ】

60年以上同じ場所で暮らし続けてきて、「家が一番落ち着くよ」が口癖の方であった。1年2ヶ月という短い時間ではあったが、大きな事故もなく在宅生活を送ることができ、最後にÀさんの行

きたかった喫茶店にも行くことができた。利用者様の思いに向き合い、支えられた事を嬉しく思う。入所先の特養には、コロナが落ち着き、可能であれば外出支援でその喫茶店へまた連れて行ってほしいと申し送りをした。住み慣れた場所で暮らしたい。そんな思いに寄り添い、地域の在宅生活を支えられる事業所であり続けたいと思った。

利用者がかねてから希望されていたいきつけのお店、本人にといつては生活の一部になっている場所へ行くことができ、利用者のニーズを叶える支援ができた。コロナ禍で感染予防に必死になっていた中で達成できた外出支援、久し振りに介護職としての喜びがスタッフ間であった。引き続き利用者のニーズに答えつつ、介護職員のやりがいについても追求していきたい。

コロナ禍で地域交流を図る「いるか保育園との交流」

東京保健生活協同組合 斎藤 雄一郎

【キーワード】地域交流 / 楽しみ / 多職種との交流

新型コロナ感染拡大前は地域交流の一つとして近隣の保育園と交流を深めてきました。七夕や納涼祭・敬老会・ハロウィン・クリスマス会・新年会など、季節の行事にお互い参加してきました。特に納涼祭は町会の方と共同開催の大イベントのため園児達が参加できるよう、直接保育園に参加のお願いをして参加を実現してきました。

近年の核家族化や園児たちの祖父母の年齢が50～60歳代と若く、70歳を超えた高齢者と接する事が少ない背景から、園児たちが当事業所で交流することは、高齢者と触れ合う機会を得ることができ、成長過程には大変有意義であること、園児たちが作った作品やお遊戯を喜んでもらう事は、園児たちの自己肯定感を高めることができると園長先生が高く評価をしていました。このような理由から私たちは開設当初から地域の保育園と交流を図ってきました。

しかし、新型コロナ感染が広がり、直接会う交流が出来なくなりました。そんな時に何か違う形で交流は続けられないかと考え、私たちは利用者と作製した季節の貼り絵などの作品を保育園に届けることにしました。保育園からも園児の作品が届き事業所内に張り出すと利用者が喜んで見ていてとてもうれしかったものです。

それでも暫くすると利用者からは送迎時に車の中から小さい子供見ると、「かわいいね。いくつくらいかな」等の発言が聞かれ、小さい子供と触れ合う機会が欲しいのではないかと感じ、再び私たちは何か良い方法はないかと考えました。そんな時に、保育園から、Zoomでの交流の提案があり、早速敬老会に向け準備を進めました。利用者たちは園児へのプレゼントの作製をしながら、Zoomでの交流会を楽しみにしました。

当日は、テレビ画面にZoomを繋げ、園児達と画面越しの交流が図れました。保育園からは、敬老会のお祝いの言葉・歌の披露があり、画面越しではありましたが、手を振ったり、「いくつなの？」と質問をして、利用者様はほっこりした笑顔で楽しそうに聞いていました。

今回初めての取り組みから、今後の新しい交流の仕方を構築できました。これからクリスマス会や、新年会などもZoomでの交流を目指していきます。作品の交換も継続して行っていく予定です。

新型コロナ感染拡大により地域交流の仕方も大きく変わりました。感染の終息の見通しはまだありませんが、状況に応じて工夫をしながらどんな状況でも利用者に質の高い介護を提供できるようにしていきたいと思います。

利用者と園児のZoomを活用した画面越しの交流であったが、利用者の質問に対して、園児からの返答や、歌の披露などがあり、利用者の楽しそうな笑顔を見る事ができた。また、地域交流の工夫により利用者が満足するサービス提供をすることができた。

「近隣施設がクラスターのため閉鎖し、当デイサービスにて利用者様を受け入れたケースについて」

川崎医療生活協同組合 山崎 翔

【キーワード】居宅、他法人との連携 / 受け入れの体制 / 方針

令和2年12月中旬頃より近隣の老健施設でクラスターが発生し、併設の通所リハビリテーション（以下施設A）が感染拡大防止の為閉鎖。当デイサービスを併用している利用者様は利用日の増回、新規2件の受け入れを行うに当たり話し合いをしたケースを報告する。

令和2年12月14日近隣の通所リハビリテーション施設Aが当面閉鎖になるとケアマネジャーより連絡が入った。以前から本入所利用者で陽性者が出ておりクラスター認定されていた。

当デイサービスと併用している利用者が2名、施設Aのデイケアのみ通っている利用者2名の相談が居宅介護支援事業所より入った。そのまま施設Aの利用予定であった日程を休みにしてしまうと施設Aの単独利用の利用者は入浴が当面出来ず、外出の機会も失われ自宅に籠りきりになってしまいADLが低下する心配がある。併用の方も通所の利用回数や入浴、リハビリの機会が減ってしまうという相談であった。

当デイサービスで新規2名を受け入れ、併用の利用者は利用日の増回の体制を整える事が可能かスタッフと協議を行った。クラスターの起きている施設からの受け入れに対して、抵抗のあるスタッフは少なくなかった。

はじめに施設Aの支援相談員に連絡し、デイケア利用者の感染の可能性について確認を行った。クラスターが起きたのは本入所のみであり、利用者・スタッフ共に接触の機会がないこと、当然接觸者には該当しないこと、閉鎖を判断したのはエレベーターが共有なので、感染拡大させないためであることを確認。

次に受け入れ相談を受けている方、併用している利用者、施設Aのみの利用者の健康状態を確認した。該当の利用者すべて風邪症状は認められず健康状態は良好であることが確認できた。管理者として受け入れは可能と判断し、スタッフと協議を行った。上記の説明を行ったうえでも受け入れに難色を示すスタッフがいたため、施設Aを利用していたのを理由に断るのは、本人の希望しているサービス利用の権利を阻害することであり、自治体からもその旨通達が来ている事や何よりも利用者が本当に困っていることを伝えたところ納得のうえ、了承された。デイサービスでの感染対策は従前通り徹底して行う事をスタッフと確認した。

その後、新規利用者2名の受け入れと併用利用者の入浴日を含むスポット利用の調整を居宅介護支援事業所と相談を行った。

ADLの把握、疾患や障害のレベルの確認のためのインテークを取り急ぎ行い、スポット利用の利用者の居宅介護支援事業所は、普段から顔の見える関係作りをしてきたため、連携は容易に行うことができた。施設Aとも顔の見える関係であったため、新規の情報で不足している部分は連携を図り補足することが出来た。横の繋がりが強化され相談しやすい関係作りも出来た。

新規受け入れやスポット利用の受け入れを実施したことで、従来の業務や入浴介助などスタッフには負担をかけてしまったが、「困ったときはお互い様。いつうちのデイサービスが施設Aの立場になるかもわからない。」という意識がスタッフ間で芽生え、チームワークも更に強固になった。

まだワクチンの供給もままならないなか、近隣の介護施設で次々とクラスターが発生したことにより、スタッフからは不安の声が寄せられた。クラスターが発生している施設から新規利用者を受け入れる事に対して各スタッフに不安はあったが、施設 A への陽性者との接触状況や体調確認をこまめに行い、従前からの感染対策を徹底する事で納得された。この時点ではデイサービスきょうまちから陽性者は発生しておらず、日々当たり前に行っていた感染対策が感染拡大防止になっていたと思われる。

日々の感染対策は通常業務を圧迫し大変な事であるが、継続する事で感染防止が行え、継続的にサービスを提供する事で利用者様の ADL の維持や生活を守る事に繋がるという事が理解できたケースであった。

利用者様が「困っている」という事に関係各所が一体となり、スムーズに対応が行えた事や施設の閉鎖などで継続したサービスの提供が危ぶまれる時には各施設の顔の見える関係や相談しやすい雰囲気作りがいかに大切で、そのことが利用者様の生活を守る事に繋がると実践を踏まえて理解が出来た。

神奈川県連の介護福祉委員会の議論の中でも看取りの方や通常時の面会方法や家族との手紙のやりとりを行う等工夫をこらしながら行い、より良いサービスの提供に努めている報告もある。

「事業所として入居者・利用者に寄り添う援助の取り組み」

社会福祉法人坂井輪会 内田 浩貴

【キーワード】連携 / 希望の聞き取り / 季節を感じてもらう取り組み

【事例①ショートステイ】コロナ禍において行事が中止する中、少しでも季節を感じてもらえる取り組みと夏場の水分摂取の促しも兼ねて、何かできることはないかと検討を行った。

おやつ時に水分摂取にかき氷を提供した。かき氷の提供は夏を感じることができ、喜ばれる方が多く見られた。そのため、定期的に実施。水分摂取（お茶や水、麦茶等）がすすまず血尿が見られる方がかき氷だと喜ばれて摂取され、血尿も解消された。

【事例②グループホーム】コロナ以前は入居者と共に食材の買い出しへスーパー等に行き、自身の目で様々な食材の品質を確認して選んだり、食材をみながら今日の献立を考えたりしていたが、感染症予防の観点から現在は中止している。

少しでも選んで購入してもらえるように果物や野菜の通販を検討した。はじめは職員がみて定期的にどれるようになった後、入居者の方に選んでもらえるように検討していく予定である。

【事例③デイサービス】当事業所は基準緩和の事業所の為、利用されている方は自立生活をされている方々であるが、コロナの影響で普段の生活スタイルが一変した。デイサービスに来ることが交流、運動等の外出をする大切な機会となっている。しかし、楽しみにしていたお花見も昨年度は中止、今年度も中止を計画していたが、ご利用者の希望（ドライブだけでもよい）から再検討となった。

基準緩和の事業所の為、運動を兼ねて感染症対策を実施しながらお花見を計画した。お花見当日は桜が満開で、桜の木の下の遊歩道（新潟市の白

山空中庭園）を皆さんと歩行訓練をかねて実施した。いつも以上に歩行される方が多く見られた。途中、買い物にお団子屋さんにもよって買い物も楽しまれた。中にはお嫁さんやお孫さん等にお土産にすると嬉しそうにお話をされていた。（食べ物は自宅で召し上がりいただくものを購入していただいた）

【事例④特養】以前は入居者全員（80名）が集まって毎月誕生会を実施していたが、ボランティアやご家族が参加できないことやコロナにより人数が集まることが困難なため、小規模で開催が出来ないか職員間で検討した。

今まで誕生会を皆さんで実施していたが、中止ではなく、その月の誕生日の方に集まってもらい小規模での開催を実施。特別な日として楽しんでいただける様にケーキを外注でお願いしてお祝をした。全体でできないことへの寂しさはあったが、ケーキを召し上がり特別な日として楽しんでいただけだ。

コロナ禍においても日常の生活に戻れるように、また少しでも季節や行事を感じてもらえるように、入居者やご利用者の立場に立って物事に取り組むことができた。

「コロナ禍で頑張ってきた事例」

公益社団法人石川勤労者医療協会 浅倉 知己

【キーワード】感染症防止対策 / 楽しむことにもチャレンジ / コロナ禍でも豊かな時間を

コロナ禍で外出の機会が減少し、家族との面会制限がある中で利用者の方に有料老人ホームでの暮らしに日常を取り戻す機会を一つでも多く提供したい。そんな思いを抱く一方で、感染のリスクを考えると、集団での活動に対して検討する必要がある。

【事例①】日にちを分けて夏に「花火大会」を開催した。】

物理的な距離を保ちながら「花火」という心理的な隔たりを取り除き、また十分な介護職員や看護職員の配置により、安全な体制で利用者一人ひとりが楽しみを体感していただくことができた。

コロナ禍で外出の機会が以前より少なくなった。有料老人ホームの中だけで過ごす時間が長く、そこに居ながら楽しみを提供したいと考えた事例を報告する。

【事例②手作りおやつの提供】

おやつの時間に手作りおやつを提供する機会を増やすことによって「見る・味わう」といった満足感を得られた声が多くの利用者から寄せられた。さらに新設する小さな畑で野菜や花を植えることにより、四季も味わっていただけるよう演出し喜んでいただくことができた。

コロナ禍で感染予防に日々職員も利用者も神経をすり減らして支援している中で、それでも今できることを見つけ、安全に行動することができた。

コロナ禍での歯科との連携の「看取りケア」

～これまでの歯科衛生士との関わりを活かして～

公益社団法人石川労働者医療協会 長峰 あゆみ

【キーワード】連携 / 安楽 / 信頼関係



一番、信頼を寄せていた職員と共に

コロナ禍で当グループホームでは、1～9月の間に1ユニット（9名）で4名の方が永眠された。入院したら面会は出来ず、亡くなるときも側に付き添うことは難しいことが多い。病棟の主治医との連携で、看取りケアを実践した。昨今、歯科との連携強化が言われているが、当ホームは10年以上にわたり、歯科との連携を実践していた。また、歯科全体で認知症の学習会をするなど、認知症ケアの学習交流の連携も図っている。看取り期においてご本人の安楽のために歯科口腔ケアとの連携を実践し、そこからの学びを報告する。

Aさんは80代で要介護度4、認知症・知的障害などがあり、202×年、×月、突然、脳梗塞を発症。入院治療したが、回復は見込めず、病棟主治医が、当ホームの訪問診療の医師だったこともあり、退院調整をして2週間後に退院。看取りケアを開始した。

脳梗塞の方の看取りケアは初めてで、嘔吐や誤嚥のリスクもあるため、特別指示書や訪問看護の依頼をした。また数年にわたり、同法人内の歯科と連携をとっていたため、経口摂取ができなくなったA氏の口腔内の乾燥を防ぎ、安楽に過ごせることを目的として、歯科衛生士の口腔ケアの継続を依頼した。これまでの看取りケアの経験で、口腔内の乾燥、状態が悪いと「苦痛表情」をされる方が多く、様々な文献でも、看取り期における苦

痛は「口腔内の乾燥」とあった。また言語聴覚士とも連携をとり、少しでも水分摂取ができないかなどの評価も依頼した。脳圧が上がると「嘔気」を伴い、口腔ケアも言語聴覚士の評価も困難かと思われたが、幸い、嘔気はなく実践できた。言語聴覚士の評価では、完全側臥位にて、スポンジブラシでジュースを含ませると意欲的だったが、嚥下するレベルではなく、気持ちは食べたいが、嚥下機能的には「困難」と判断された。介護職員は、潤す程度に、スポンジブラシでジュースなどを含ませて頂いた。退院翌日からこれまで行っていた口腔ケアに歯科衛生士に入って頂き、病状の説明とリスク、目的をお伝えすると「頑張ってみます！」と言って頂いた。数年来の関わりのため、ご本人も歯科衛生士に信頼を寄せており、安心して口腔ケアを受けていた。介護職員だけでは、舌苔の除去はなかなか時間をかけて出来ず、技術的にも未熟であったが、専門職との連携で、口腔内は非常によい状態で過ごすことができた。そのため、これまでの看取りケアの中では、一番「安楽」と思える状態で過ごせた。A氏は、独身であったため、看取りを共にできるご家族は近隣にはおらず、ホーム職員が家族のようになっていた。その大切な知人の一人に歯科衛生士も含まれていたと思う。退院後、10日目に、信頼する職員に見守られ、安心した表情で穏やかに旅立たれた。その2日前まで、歯科衛生士の口腔ケアを受けることができた。

今回の歯科衛生士との連携は単に、口腔内の状態をよくするためだけでなく、A氏の人生の最終章を共にしてきた一員として信頼できる歯科衛生士の口腔ケアであったことも、安楽さにつながったと思える。介護の分野では「安楽」という言葉はよく使う。意味は「苦痛がなく、穏やかで楽なこと。満ち足りて心が平和のこと」である。終末期においては、どんな人も、「安楽」を求めるだろう。苦痛がなく心が平和な状態で、どんな人生を歩んできた人も永遠の眠りをつけたら、幸せだろうと思う。でも現実はなかなか難しい。コロナに感染して亡くなった方は遺骨になり、家族の元にかえってくることもある。自然災害で突然のお別れもある。このような状況の中で、「看取り」が出来ること自体が幸せなことかもしれない。しかし、どんな人も安楽な最期が迎えられるように、多職種が連携し、様々な視点から携わっていくことは、尊厳を守り、人権を守るたいせつな実践だと思う。それが、当たり前の社会になるように発信していく必要もある。また、余談ではあるが、多職種連携に加算がつくから、連携を目的とするではなく、みんなで同じ目的に向かって歩んだ結果が、加算となっていくべきではないかと思う。

多職種で、専門性と科学的根拠を持ちながら、終末期の方の尊厳と、その人らしさを尊重する介護を深めることができた事例である。



ケアを続けて下さった 信頼する歯科衛生士とのご様子
(認知症の方の対応、関わりも素晴らしい衛生士さんです)

「新型コロナウィルス感染症始まりの混乱の中での デイサービスほやね城北での取り組み」

一般社団法人いしかわゆめ福祉会 田中 栄一

【キーワード】新型コロナウィルス感染症拡大 / 第1回目の緊急事態宣言での混乱 / 利用者の気持ちを尊重してのデイの利用や自粛について、そして再開

2020年春、日本中に新型コロナウィルス感染症が拡大、3月に全国一斉に緊急事態宣言が発令、県では通所については利用者に対して必要であれば参加自粛を求める声明も出された。その中でデイサービスの登録定員の約3割が利用自粛となり、その間のデイサービスほやね城北での取り組みについて報告する。

デイサービスほやね城北は機能訓練特化型デイサービスとして運営している。食事や入浴などの生活機能面のサービスは実施していないが、機能訓練だけでなく、人的交流や軽度認知症の方の受け入れも目的として実施している。そのため利用者層は日常生活支援総合事業対象者（要支援、事業対象者）から要介護者までと幅が広い。

今回の緊急事態宣言発令により利用者の3割が本人、家族の意思により利用自粛となった。コロナ禍の特別通達として訪問や電話での安否確認、代替えサービスをした場合、利用者の同意があれば介護利用料を算定できる通達があった。しかし、その通達は要介護認定された方に限られていて、日常生活支援総合事業利用者には適応されないものだった。

電話での安否確認を行ったが、特別通達について利用者や家族がとても納得できるものではなく、またケアマネジャーも把握できておらずとても混乱を生じた。訪問についてはそもそも人の接触を減らすためにデイサービスを自粛しているため、実施は難しい。自治体にも問い合わせたが算定する費用は一律利用者へ負担が生じることになっているとのこと。公費負担にはならないことなどが

説明される。また自治体ごとにルールが決められる日常生活支援総合事業に至っては適応対象ではないとの回答だった。

そのため当デイサービスでは緊急事態宣言が解除されたときに安心して利用できる、また心身機能が低下しないように何か取り組みができるかと考え、自粛している利用者全員に対して定期的に電話での安否確認の実施、またデイサービスの運営が分かるニュースの発行、自宅でもデイサービスのプログラムが実施できるように自主トレーニングの案内を送付した。

電話での安否確認では日常変わらずに過ごしている利用者もいれば、人とのかかわりができるだけ減らすために閉じこもっている利用者などさまざまであったが、自主トレーニングのプログラムを自宅で実施し、その報告をしてくれる利用者が多かった。運動プログラムだけでなく職員と会話できたことで安心できたという声も多く寄せられた。緊急事態宣言が明け、自粛していた利用者の利用が再開した。認知機能の低下やうつ症状の増悪などがみられる利用者もいたが、利用を再開して回数を重ねるごとに改善傾向に向かっている。

今も継続している新型コロナ感染症の拡大、感染拡大当初より今は情報も多く、またワクチン接種も進んでいるため、混乱は少ないがまだまだ予断は許さない。介護サービスは介護が必要な人が受けるサービスであるはずなのに自粛するようにと通知が出され、とても大きな矛盾を生み出していると感じた。人員が少ない中の取り組みには限界もあり、今までの介護にかかる問題が大き

く露呈したと感じた。そのような現状のなか、デイサービスは必要なサービスであると実感ができ、今後も感染対策を行いながらデイサービスの運営や利用者の潤いのある生活の支援をしていきたい。

すべてを利用者負担にしてしまう現状もそうだが、利用者の生活を守るという観点では電話連絡やデイサービスとして安心を届けることができたと思う。宣言が明け、デイサービスを再開し、「やっぱりここに来ると元気が出るわ、」という声には職員も救われていると思う。

みんなで学ぶ～えがおの架け橋～

福井民医連介護職集団の取り組み

社会福祉法人寿の会 斎木 健宏

【キーワード】自分の言葉で語る民医連介護・福祉の理念 / 介護職としての専門性・質の向上 / 共に育ちあえる介護職集団

福井民医連では 2020 年度に『介護・福祉の理念とともに、介護の質を考える～えがおの架け橋～』の学習会を、福井民医連介護事業所に所属する全ての介護職員（正職員・臨時職員）を対象に実施した。コロナ禍において全ての職員が学びを共有する事については課題もあったが、その中で介護委員会（介護職部会）が議論を重ね、企画・準備・運営を行い、参加した職員が生き生きと学びを深める事に繋がるものとなった。今回、福井民医連介護職員一丸となって取り組んだ研修・交流企画について報告する。

第 42 期の「全日本民医連 介護職委員会」で提起された『介護・福祉の理念とともに、介護の質を考える～えがおの架け橋～』の学習会を全介護職員対象に実施し、福井民医連介護集団の介護の質の向上を目指す事を目的とした。さらに今回の研修の目標として、介護委員会メンバーが自分の言葉で、介護・福祉の理念を語る講師となり、参加者にも楽しみながら、理念を学び深め、自職場を振り返りながら、介護・福祉の理念について語り合える内容とした。

コロナ禍での研修開催にあたり、感染予防対策の徹底、福井民医連の 13 の介護事業所（部署）職員を 2 つのグループ（福井市・敦賀市）に分け、計 4 回の開催をオンライン形式で実施。各回の参加人数も調整し、密にならない対策を講じた。講義はグループごとに行うが、感想などの意見交換はオンラインで他グループの感想等も共有した。

参加数 90 名（＊開催当時 正・臨職数 92 名）
研修に参加するにあたり事前に『えがおの架け橋』

の冊子の読了をおこない、感想を集約（全職員の事前学習・共通知識習得）

全日本民医連介護職委員会作成のパワーポイント資料を元に、介護委員会メンバーが自分の言葉で理念を語る講師となる。（介護委員会メンバーの学習の向上）

参加者がグループワークを行い、自職場を振り返り、介護・福祉の理念について意見交換し内容を深める。また今後、介護の質を高めていくために、自分たちに出来る事を意見交換した。（他事業所介護職員との交流しながら理念を深める）

研修を振り返り、目指したい介護福祉士（介護職）像の目標を記入。（各自の目標設定）

介護・福祉の理念が打ち出されてから今まで何度か学習する機会はあったが、ほぼ全ての介護職員を対象とした上で、介護委員会メンバー自身が自分の言葉で理念を語り、講義を行っていく事は、ほぼ初めての機会であった。企画段階では『自分たちでは説明できない』、『難しい、自信がない』などのネガティブな意見もあったが、計画を進めて行く中で、『なんとか自分たちの言葉でやってみよう』、『どうせやるなら参加する職員が楽しく参加出来るものにしたい』などポジティブな考え方へ変化してきた一面も感じられた。これまで、介護委員会メンバー内では様々な課題を共有しながら乗り越える事ができ、今回も 1 つの成果であったと感じられる。

研修に参加した各事業所の介護職員においても、介護の質や専門性を高めるために何が出来るかを考えるきっかけにもなり、事前レポートから事後

レポートの段階においては意識の変化を感じられる内容も多くみられた。他職場との交流を踏まえたグループワークからも、自職場や自分自身を振り返りながら、他職場との情報交換にも繋がり自身の考えが深まるきっかけや、悩みや喜びを共有する事で連帯感の強化にも繋がっていたと感じられる。また、自身のスキルアップについても考えている職員も多く、認定介護福祉士等の上級資格に興味を示す職員もあり、今後、介護福祉士会や社会福祉協議会とも連携し、専門性向上の研修の機会をすすめていく必要性も感じられた。

介護・福祉の理念を深め、介護の質を高めていくためには今後も継続した取り組みが必要となる。2021年度は福井民医連内の介護事業所において、『えがおの架け橋』で提起された介護の質を高めるための10のテーマの中から1つを選んで、職場内で議論し、具体的に実践していく事に取り組んでいる。今後も介護の専門性を追求しながら、全体で高めあえるように進めていきたい。

福井民医連内において、介護職集団は1番人数の多い組織となっている。今後も介護の専門職集団として、共に学び、励ましあい、高めあい、支えあいながら、育ちあう組織づくりを目指していくよう奮闘したい。

介護職集団全体で学びの機会を持つことにより、専門性と科学性の追求について深める事が出来たと考える。

福井民医連 えがおの架け橋学習・研修会

計4回 2会場にて90名の介護職員が学び、語り合う！



介護福祉会メンバーが講師となり
自分の言葉で語り合おう！



グループワーク発表（それぞれの成果を発表）



福井飲食をつないでグループワーク発表



「同居家族の陽性により濃厚接触者となった利用者への対応」

社会福祉法人やまなし勤労者福祉会 横内 俊洋

【キーワード】①多職種協働 ②電話 ③センターでの取り組み / ①連携 ②訪問 ③多職種協働 / ①認知症 ②心の孤独

【事例①小多機】息子様と二人暮らしの80代の利用者A様は息子様がコロナ陽性の診断で濃厚接触者となり2週間の自宅待機となった。息子様は入院となりA様は認知症をかかえていたため、一人暮らしの生活は心配が多かった。小多機としての対応と法人内の訪問看護、民医連の共同組織の支援サービスが入った事例を紹介する。

①法人内の事務職員に協力してもらいA様の自宅内を消毒。②訪問職員を限定し、一日3回の訪問支援に入った。(安否確認・体調確認・食事支援・環境整備・消毒・洗濯)③法人内の訪問看護に入つてもらい体調確認を実施した。④息子様からネコの世話の依頼があったため、民医連の共同組織『ゆいまる』にサービスを依頼した。

多職種と連携し、環境の変化をさせずにA様が2週間一人で生活に不安なく過ごすことが出来た。多職種の協力があったからこそ支えることが出来た。

【事例②デイサービス】利用者本人の同居家族が陽性者になった場合、あるいは同居家族が濃厚接触者となった場合、利用者本人の生活に影響が出てしまう。本人は陰性であることが分かったとしても、数日は体調の様子を見るためデイサービスを休むことになる。週に何日か通うデイサービスを休むことは利用者本人の生活リズムを崩すことに直結し、中にはこの数日間だけで身体機能や認知機能の低下を引き起こす利用者も少なくない。

「病は気から」という言葉があるように、デイサービスももそのでは、このような理由でデイサービスをお休みすることになってしまった利用者に対して、心が孤独にならないように電話での安

否・体調確認と言語コミュニケーションに取り組んだ事例である。

週3日の利用日(通常であれば利用していただろう)に合わせて午前と午後の2回電話をかける。これから数日間は電話することを伝え承を得た(振り込め詐欺等と勘違いされることは困るので)。このようなかかわりを通して本人のメンタル維持を図りたい旨を家族・ケアマネージャーへ説明し承を得た。自宅での生活で本人のペースもあるため、午前と午後の時間を双方で決めた。2回目(初日の午後)からは電話口で待っていてくれた。「待ってたよ～。変わらんよ～。洗濯物ほしたよ～。」などと色々なことを話してくれた。デイサービスで仲間が待っていることを伝えると喜んでいた。8日間のうち4日(計8回)の電話ができ、毎回元気そうな声が聞けた。デイサービス利用再開が問題なく出来た。

急な状況変化の中で、デイサービスに出来る事を考え取り組んだ。研究をした訳ではないため「何も取り組まなかった場合の8日間」との比較は出来ないが、少なからず本人がまたデイサービスへ行きたい=明日のために今日を生きたいという気持ちを引き出し、支えるための一翼は担えたのではないかと振り返る。今回のようなケースは今後も必ず起ると予測しているが、難聴によって電話でのコミュニケーションが取れない方や、様々な生活スタイルによって工夫や検討が必要なケースも出てくると思われる。デイサービスだけの力ではなく、ケアマネージャー・家族・連携機関との多職種連携を軸に様々なケースに対応していくたい。

【事例③看多機】コロナ禍の為、長期入院後に在宅復帰する場合、退院時リハの在宅訪問がなく在宅での評価ができないことや家族も本人と会えないまま退院となるケースの在宅支援をどのようにしていくのかを検討した。

他の居宅介護支援事業所のケースであっても、独居の場合や在宅環境に問題があるケースを、退院後、まいほーむいさわで泊りを利用するなど、多職種連携でアセスメント、家屋評価を行い、在宅復帰を図った。

泊りを利用することで、昼夜の状態を多職種でアセスメントができ、本人にできる事、支援が必要なことが明確になった。必要な介護サービスの導入や福祉用具の選定、住宅改修の準備などが行え、スムーズに在宅生活に移行ができた。

認知症や一人暮らしでも「安心して住み続けられるまちづくり」の体制が整うことは突発的な事態に対応出来ることを実感し、私達の自信にもつながった。

コロナ疑いが発生し、施設内消毒を実施することになった。コロナに関する知識などもなかつたため、医療と連携して感染管理認定看護師が直接指導して、施設内ラウンドでの対策・改善点、コロナについて深めることで大きな安心感を持つことができた。

利用者の置かれた生活実態は急な状況の変化に左右されることがあるため、どのような状況でも第一に寄り添うことから出発することが大切であることを今回の事例から学んだ。

「安心して利用できる憩いの場の提供」

上伊那医療生活協同組合 高橋 真一

【キーワード】通所介護 / 憩いの場 / コロナ禍

I はじめに

2020年、新型コロナウイルス感染拡大をうけ、通所介護（以下DS）においても未知のウイルスに対する感染予防対策が重要課題となりました。今回、デイサービスあおばが利用者や家族が安心して利用できる憩いの場となるよう、どのように感染予防対策と楽しめるサービス提供の両立を工夫したのか、その経過を踏まえて報告します。

II コロナ感染症による影響

コロナ感染者が全国で増える中、当初の感染対策としてはマスク・手指消毒の徹底、体調管理をする以外に情報はありませんでした。そのような中、3密（密閉空間・密集場所・密接場面）になりやすく抵抗力のない高齢者は生命の危機に直面しやすい、他県のDSでクラスターが発生したなどのニュースが流れると、「ここは大丈夫なのか?」「不安だから暫く休みます」という訴えも聞かれました。また、感染予防対策の一環として利用者のご家族に対しても細かく仕事内容や他県の往来有無を聞く必要がありましたが、信頼関係が壊れ利用が終了となるケースもありました。現在も他県より家族・親類が来られる・来られた場合に利用を控えて頂くなどの対応に関しては御理解が頂けない事もあります。

III 感染対策

デイサービスあおばにおける感染対策は、保健所や法人感染対策室の指導の元ですすめています。体調管理としては、送迎時・送迎後の検温と風邪症状の確認をおこなっています。また衛生管理としては、マスク着用の徹底、・来所時、食事前等の手指のアルコール消毒、車の使用後のアルコール

消毒、パーティションを使用した飛沫対策、歌などの飛沫を伴うレクの制限、使用した物品の消毒をおこなっています。加えて、利用者家族の体調チェック・県外往来の確認、定期的な感染予防のご協力のお願いの通知などを行っています。

IV 利用者・家族の声

コロナ禍でのDSの利用に関しては、DSが生活の一部となっている利用者が大半を占めています。感染が拡大するにつれ利用者や家族からは、不安だけど利用しなきゃね、「お風呂入らなきゃ困るし」、「リハビリしないと身体が良くならないから」、「日中、一人にしておけない」などの声が聞かれました。しかし大勢集まる場所、いつコロナに感染するか不安だという声も常に聞かれています。

V コロナ禍での憩いの場作り

感染拡大前はデイサービスあおばでは、主なレクリエーション（以下レク）を集団でおこなっていました。しかし、感染拡大を受け、できる限り3密を避けることを余儀なくされました。そこで、集団で行うレクから個別・小集団で楽しめるレクに変更しました。変更に際しては、利用者の趣味や関心のある活動を知るために、利用者当人や家族から興味関心チェックシートなどを用いて聞き取りをおこないました。これを元に、以前からおこなっていた脳トレ・将棋・パチンコ・麻雀・畠などのレクに加え、手芸（刺し子・編み物・縫物）・籐細工などをおこなう利用者が増えました。これまで、入浴や運動が楽しみで来られる利用者が多い状況でしたが、それに加えDSでおこなう刺し子や籐細工を楽しみに来られる利用者も増えている印象です。地域との交流は現在Web形式を用い

て定期的に小学校の生徒達とクイズや手遊びなど画面越しでも楽しめる内容を考えて頂き継続しています。

VI　まとめ

昨年からのコロナ禍で、皆どのように対応してわからない不安の中でしたが、基本的な感染予防の徹底を図り、利用者様やご家族の協力もあり感染予防に今のところ成功しています。また、この間休む事が少なく逆に稼働が例年より上回ったのは、多くの利用者様にとってデイサービスあおばが生活の一部として、憩う場所として必要とされてきたのだと思います。しかし感染拡大が起こる中、利用を控える方もいました。人と人との繋がりが制限される中、安心して利用できる場所が今まさに必要とされていると思います。外出や歌を歌うことなど制限されることも多いですが、工夫をして楽しめる内容を提供出来るようにしていきたいと思います。

利用していただいている最中は、その方の望む雰囲気や内容の提供を、ワンチームで工夫してきています。

「サービスを止めないため、事業所クラスター阻止に向けて」

医療法人社団静岡健生会 清野 佳昭

【キーワード】休憩時間 / 黙食 / クラスター阻止

新型コロナではないが職員が肺炎にかかったり、濃厚接触者と認定されたりと、昨年の国内感染が増え始めた時からヒヤリとすることが時折あった。感染しないことを追求することはもちろんだが、誰もが罹り得ることを前提に万一誰かが感染してもクラスターにせずサービスを止めないことを目指している。日中独居などの利用者が多い中、クラスターが発生してサービスが止まると本人、家族の生活が守れなくなる。それは避けなければならない。

2020年4月、職員が発熱し肺炎と診断された。また、感染者と気づかず接した職員が後日濃厚接触者と認定された。前者は新型コロナではなく後者の職員に感染はなかった。仮に感染していたとするとマスクを外す昼食休憩がクラスター発生の一因となり得る。休憩時という場面の切り替わりでは、感染対策に気が緩む時であり、クラスター発生の恐れがあるため、貼り紙等も使い「黙食」を呼びかけ続けている。休憩室を2か所に分け、極力「密」にならないように取り組んでいる。

休憩中でも食事の間だけは会話を禁止しており、静かに食べなければならないことはストレスを感じる職員も少なくないが、自分の健康、自分の家族の健康、利用者や利用者家族の生活を守るために「黙食実行」のお願いやねぎらいの言葉を管理者から伝えることを今後も続けていく。

サービス提供を止めず利用者とその家族の生活を守ることを念頭に、その他の感染対策にも励むことが出来ている。



「介護がほんとうに好きだから」～やりがい事例集への取り組み～

医療法人社団名南会 松原 竜二

【キーワード】介護 / やりがい / 離職阻止

「介護の現場で感動した出来事」、「心に残った利用者とのふれあい」など、介護の仕事をしている方ならそんな経験が少なからずあるのではないかでしょうか。こうした出来事こそが介護の魅力、介護を続けられる力になっています。愛知県介護職部会では他県連を参考に2019年、2021年に介護のやりがい事例集作成を行っており、その取り組みについて紹介します。

やりがい事例集の目的は介護のやりがいを見つめ直し、離職の防止や介護職の専門性、機能向上につながることを目指しています。2019年度のやりがい事例集は愛知県の4法人31名の副主任以上、2021年度は4法人21名に執筆を依頼しました。完成した事例は冊子にして各事業所に配布しています。

ここで2021年度のやりがい事例集の中から一部ですが事例を紹介します。

【事例】この仕事を始めるきっかけは同居していた祖父・祖母の影響が大きく、小さい頃にやさしくしてもらった事で何か恩返しがしたいとの思いで学校に行き始めました。就職して色々な方との出会いがあり、「○○くん、いつもありがとう」と言われる言葉が自分の祖父・祖母に言われているようでうれしく、やりがいを感じていたのを今でも覚えています。そんな私を大きく変えたのはある利用者様との出会いでした。癌を患ったタミナルの利用者様です。性格はとにかく意地っ張りで弱音を吐かない人でしたがある日、夜勤をしていると「胸が痛いの。不安で眠れないの」と言

われました。ベッドサイドに座り背中を摩って昔の話をしていると「ああ、ほっとする。私も死ぬ？」と涙を流されました。30分程側にいると眠り始めました。

私たち介護士は、いつも利用者様の近くに居ます。利用者様の本音をいつも側で聞ける大事な仕事だと思っています。普段の何気ない会話や表情からいつも寄り添える介護士であるべきだなと私は思っています。私の中で仕事を始めてからずっとモットーにしている事があります。「この人に出会えて良かった」と思ってもらえる介護士になること」です。

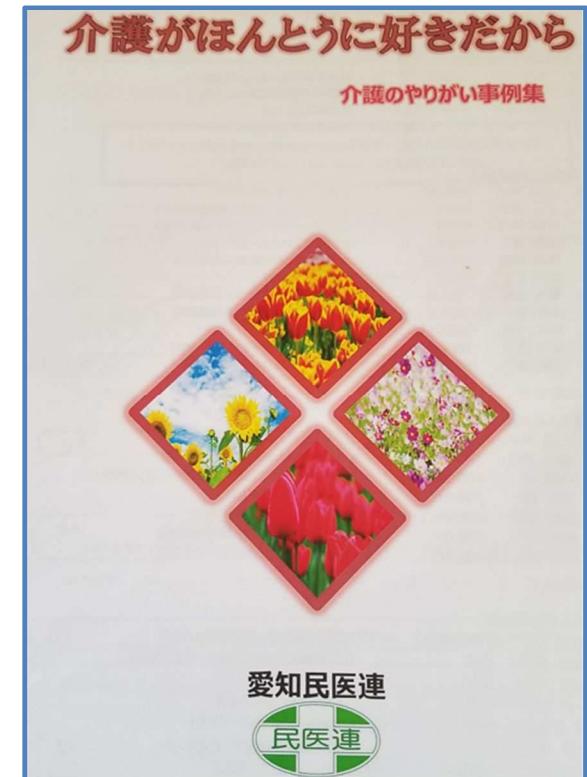
また、2019年度には執筆者と入職5年目以下の介護職員に読んでもらいアンケートを依頼しました。アンケートはそう思わない、ややそう思わない、どちらでもない、ややそう思う、そう思う、-5択で行いましたので、質問項目を一部紹介します。

質問①「介護のやりがいを振り返るきっかけになったか」70%の人がそう思う、ややそう思うに回答された。

質問②「読んだ後仕事に向き合うモチベーションは上がったか」58%の人がそう思う、ややそう思うに回答された。

【アンケート自由記述欄】人間として成長させてくれる仕事だと感じた、自分を振り返るきっかけになった、それぞれのやりがいを知ることで介護に対しモチベーションを持つことができた等の回答がありました。

介護のやりがいを言葉にすること、言葉にしたものを形にすることで執筆者は介護の魅力ややりがいを改めて考える良い機会となり、読者はそうした言葉に共感・共有することで改めて介護の魅力に気づかされることもあったのではないかと感じています。また、事例を作成することで介護士としての専門性や介護の質につながっていくのではないかと思います。2021年度版やりがい事例集も現在作成中のため、こうした思いがまた新たな職員に伝わることでやりがい事例集が介護職同士、多職種、今後介護を目指す人などをつなぐものになればいいなと心より願っています。そのため今後も運動、活動を続けていきます。



三重

「コロナ禍で職員・利用者を守る取り組み」、「コロナ禍で利用者満足度を上げる工夫」

みえ医療福祉生活協同組合 山口 由美子

【キーワード】多職種連携 / チームワーク / 学習

コロナワクチン接種を希望される利用者様が全員接種できるよう、予約、接種状況の確認を法人内の病院や診療所と担当ケアマネと協力し合った事例を報告する。

介護事業所で、予約・接種状況を利用者・家族に確認、困りごとの相談を受けた。病院や診療所と連携し、接種予約の空きやキャンセル枠などを利用者に案内した。法人病院等で接種できなかつた方にも、近隣の病院を紹介した。

利用者・家族に寄り添い、状況を確認し、多職種で連携することで、接種を希望される利用者のほぼ全員が接種することができた。

コロナ禍で奮闘している職員に労いの取り組みをおこなった事例を報告する。

全職員に対し、慰労品と労いのメッセージを送り、コロナ禍での奮闘を称え、日頃の感謝を伝えた。

長期に渡るコロナ禍で、職員の不安や疲弊している状況の中、毎日頑張っている職員に「ありがとう」と「一緒にがんばっていきましょう」という気持ちを伝えることができ、職員もその気持ちを喜んでくれた。

感染症予防やコロナ禍でのレクリエーションの工夫を介護部会や会議で共有し検討を行った事例を報告する。

行事等をなくすのではなく、感染症予防を行い、夏祭りや運動会、忘年会など季節の行事を開催した。

感染症対策の周知、準備を行い、季節の行事をおこなうことで季節を感じ、利用者さまに楽しく過ごしていただくことができた。行事を通して職員間に一体感がうまれた。

感染者が発生したときの対応、感染リスクへの不安があるため、学習会をおこなった事例を報告する。

クラスターが発生した地域からの経験からや教訓を全事業所で共有し学習した。それに基づいて、シミュレーションを実施した。

実際にクラスターを経験した話を聞いて緊迫感がつたわり、さらに準備しておくべきことや準備することなどを学ぶことができ、連携や協力体制の必要性をさらに感じた。

利用者・家族の生活に合わせた柔軟な対応を心がけ、どのような状況でも断らない介護を実施してきた。多職種で情報を共有し学ぶことで、感染への意識や対応を向上することができた。また、大変なときでもチームで力を合わせて乗り越えることができた。

「デイサービスでクラスター発生、営業再開後の現状」

医療法人滋賀勤労者保健会 宮城 美香

【キーワード】デイサービスでのクラスター / 感染対策 / 方針

デイサービスでクラスターが発生、多数の利用者と職員が感染し、一時期営業休止しとなった。再開に向けて感染対策を見直した事例を紹介する。

発生当時、利用者のほとんどがマスク着用せず、室内を自由に歩行し、利用者同士がコミュニケーションを取っていた。また室内の消毒はデイサービス終了後の1回のみだった。当初濃厚接触者のみのPCR検査実施となつたが、検査結果を待っている間にも職員の陽性者が出ていた為、利用者、職員全員のPCR検査が必要であることを保健所に要望し、デイ利用者、職員全員のPCR検査を実施、クラスターが発覚した。再開に向けて、保健所主催の学習会を実施、コロナに対する感染対策マニュアル作成、感染対策に必要な物品の準備、一連の動作を1名の職員で対応する事で人流を交差させない入浴介助の方法、対面にならない配席とシールドを設置、排泄の感染対策を見直した。

通常規模のデイサービスだがソーシャルディスタンスを確保する為、1日の利用者数を16名に減らしての再開となった。

職員の声かけの徹底で利用者は全員マスクを着用、消毒、換気を定時毎にする事で利用者・職員の安全確保をする事ができた。現在新たな感染者は職員、利用者ゼロ、利用者定員の制限をしながら通常営業を実施している。

感染対策を見直し実行する事で利用者・職員ともに安全・安心な介護の場を提供する事ができた。

「コロナ禍で看取り期の面会を考える」

公益社団法人京都保健会 白波瀬 実

【キーワード】感染対策 / 看取り支援 / 寄り添う介護

新型コロナウイルス感染症拡大防止に留意しながら、看取り期の面会について利用者・家族の気持ちに寄り添って新たな面会規定づくりに取り組んだ事例を報告する。

3年前から看多機を夫婦で利用されているA様。食事が入らず衰弱傾向となり家族や主治医とのカンファレンスの結果、施設の泊りサービスをしばらく利用し看取りの支援を行うこととなった。

他府県の息子・孫が面会を希望されていたが、住まいの地域に緊急事態宣言が出されているため、施設での面会について全面的に制限していた。

介護職員から「最期まで家族が面会できないのは寂しいので何とかできないか」との意見があり、事業所の全職員会議で「どうしたら面会できるか、本人・家族の思いを叶えるには」との検討を重ねた。その結果、新たな面会規定の案を作成。管理責任者会議で確認を受けることができた。

新たな面会規定では、感染拡大地域からの面会は原則制限するが、看取り期は月1回程度可能とした。本人・家族ともにフェイスシールドとマスクを着用。時間は15分以内。場所は施設外の相談室を利用。加えて、オンラインで面会できる環境を整えることとした。

その後、A様と他府県の息子・孫が新たな規定に基づき家族と面会され、本人・家族共に喜ばれた。

コロナ禍の感染拡大防止に関わる緊張感の中で、本人・家族の気持ちに寄り添い「どうしたら実現できるか」との視点で面会方法を考え、話し合いを重ねて実践することができた。

感染症拡大防止に留意した対応で安心・安全を追求しつつ、利用者の気持ちに寄り添う介護を実践することができた。



「新型コロナ感染により在宅生活が困難となり

緊急入所・ショートステイを受け入れた2事例」

社会医療法人同仁会 福山 祐輔

【キーワード】地域貢献・地域での施設の役割 / 安心して生活できる場所 / 多職種連携

利用者本人が新型コロナウイルス感染症により、主介護者（同居ではない）が不在となり在宅生活が困難となり、入所・ショートステイを受け入れた2事例を紹介する。

【事例①】息子様とご本人がコロナに感染し、自宅療養にて回復される。因果関係は不明であるが、息子様が自宅で亡くなられているのが発見される。独居生活困難の為、老健みみはらへ入所となる。

【事例②】デイケア利用者の主介護者である娘様がコロナに感染された。同居はされていないが精神面での不安から独居困難となり、ショートステイ利用となる。

【まとめ①・②】主介護者の感染症により、在宅生活が困難となる事例を通して、改めて地域貢献・地域での施設の役割を認識することができた。日頃利用している施設内のデイケアの利用者が、安心して泊まることが出来る場所があること、新規利用者も緊急で入所を受け入れる事ができたことで、継続して在宅生活を支援できたことは、今後の地域貢献、取り組みに対して職員育成の面から多くのことを学ぶことができ、断わらない介護の実践を経験することができた。

「利用者の生活を支える」、「継続しての在宅支援」、「地域貢献、地域での施設の役割」、取り組みに対して職員育成の面から多くのことを学ぶことができた。

兵庫

「コロナ禍でも活動的に！仲間づくりを！！」

兵庫県民主医療機関連合会 中野 啓民

【キーワード】仲間づくり / 離職防止 / WEB 活用

介護職委員会は活動開始から委員会の中で横のつながりを構築していく為、これまで様々な活動に取り組み 6 年になります。しかし、コロナ禍で新たな活動が困難な状況ですが、引き続き介護職確保・離職防止・育成について新たな取り組みをしていく必要があります。

介護職の異動は時にサービス業種の変更を伴うことから抵抗を感じる人も多く、離職の引き金になる事もあります。多職種、多業種が揃っている介護職委員会で学習会を定期開催し、それぞれの業務内容・優位点・やりがいを知る機会にしています。

第 1 弾として「定期巡回・随時対応サービス」の学習会を開催しました。学習会終了後には事業所中継を行い、法人・事業所紹介の動画を発信し、事務所の職員にインタビューするなどして、各事業所への見学交流ができない分、Web で創意工夫した取り組みを実施しました。

＜学習会後の感想＞

- ・1人ひとりの状態に合わせ、必要な支援を行うことでいつまでも自宅で安心した生活を送れる介護サービスであるということが分かりました。
 - ・他事業所と情報交換しながら、より良いサービスの提供に努めていきたいと改めて思いました♪
 - ・初めての試みで、テレビ中継にて実際に事業所を見ることができ、想像しやすく新鮮でした! (^_^)!
 - ・中継で楽しさ倍増！身边に感じられ、あつとう間の時間でした(^^♪
- また、第 2 弾開催予定を変更し、人権 cafe の取り組みも行いました。

【兵庫の介護職委員会(部会)】

- ・2か月に1回の定期開催
- ・構成メンバーは7法人から各2名と介護福祉委員、事務局を加えた16名
- ・介護職委員会のマスコットキャラクター「たみさん便り」を不定期(月一回目標)発行

コロナ禍でも創意工夫してできること(WEB 活用で)を積極的に行い、仲間づくりにつながる活動を前進させることができました。

「家族の一員として、一緒に支える終末期在宅介護」

社会医療法人健生会 中西 淳

【キーワード】家族 / 家族の要望を実現させる / 第二の家

□複雑な家庭環境

Iさんは自身が入院中に夫を自宅で亡くし、退院後は娘夫婦の家で同居を始めることなり事業所に相談があった。娘といつても血の繋がった家族ではなく諸事情があり娘という形をとられている。娘の夫は身体障害があり、軽度の介助が必要な時もある。孫もいるが、こちらもまた血縁関係のある家族でなく諸事情があり家族という形をとられ、精神疾患がありながらも、10代半ばで未婚の母として1児を育てている。キーパーソンは娘となるがパートを2件掛け持ちで同居の家族に介護の助けを借りることはできなく、複合型サービスを選択された。

□末期癌でありながら

複雑な家庭環境でありながら娘は本人の「家に帰りたい」という意思を尊重し、不安を抱えながらもできる限り自宅で過ごさせてあげたいとサービスの調整を行った。末期癌で疼痛緩和のための麻薬の使用や、少しでも食べられるもの、栄養のとれる物と一緒に考えてQOLの向上を目指しながら本当の家族の様に接することができた。家族の就労時間に合わせて送迎前に勤務地に出向いて鍵の受け渡しを行い、介護負担の軽減のための宿泊も週間予定に組み込んだ。もちろん緊急での宿泊も受けながら、疲れた家族の愚痴は夜まで事業所で聞いた。

Iさんの癌は着実に体を蝕んでおり、日によっては体を少しでも動かすだけでも顔が苦痛で歪み、日によっては介助者を罵倒する日もあった。

調子の良い日は、イオンモールに外出し、外食を楽しめることもあり、息をするのを忘れるほ

ど嬉しそうに話をされている姿は病気のことを一瞬でも忘れさせてくれるひとときでもあった。

□最期に叶えたい事

Iさんの部屋には演歌歌手のポスターが貼ってある。演歌歌手には詳しくないが、川中美幸や福田こうへいといえば紅白歌合戦でもお目にかかる有名人。「昨年は福田こうへいが体調不良でコンサートが中止になって行けなかったから、今年の樺原文化会館のコンサートに連れて行ってあげたい」と娘にお願いされた。

コンサートは夜間の部で、実際そういった時間に事業所としてサービス提供を行うのは無理があった。それでもきっとこれが最期のコンサートと思うと、矢も盾もたまらなく事業所の職員有志がお手伝いすることになった。

当日は通いサービス後に自宅へ伺い、状態観察やコンサートに向かう準備を行った。会場へはリクライニングとティルトは最大に下ろし、ほぼストレッチャー状態で送迎車へ向かう。会場へは家族とともに入って頂き、その間職員はいつでも緊急の連絡を受けられるように外で待機。大事もなく公演が終わり出てこられたIさんは興奮した様子で、帰りの送迎車では上機嫌に話しをしていた。

□家族みたいなものですから

コンサートも終わり普段通りの生活を送りながらも、2ヶ月が過ぎる頃には体力的にも限界がきていた。主治医のいる病院に入院されてから危篤の電話が職員の携帯電話に掛かってきたのはそれほど長くなかった。

「手を握ってあげてください」と家族に促され、そのままIさんは苦しむことなく亡くなられた。

最期に手を握っているのが自分でいいのかと思いながら家族の顔を見上げると「皆さんほんとに良くしてくださって、家族みたいなものですから」と安堵の表情で話された。今まで感謝の言葉はたくさん頂いたことがあるが「家族みたいなものですから」は初めてだった。小規模多機能や看護小規模多機能は時折「第二の家」などという表現をされるが、「第二の家」にいる職員は「第二の家族」として関わっているのだと I さんと家族に教えられた気がした。

家族とともに寄り添うこと、本人、家族の要望に何とか実現させるべくスタッフが動くことができた。

「終末期における家族の思いに寄り添う」

ひかわ医療生活協同組合 土田 寿絵

【キーワード】面会禁止 / 終末期 / 多職種連携

サービス付き高齢者住宅において、これまでインフルエンザ等の感染症流行期以外では、特に面会規制を設けることはなかった。新型コロナ感染症の流行に伴い、面会禁止の期間が続いている。入居者や家族の思いに寄り添う為、職員間での話し合いを行った。

デイサービスへ出かけながら、高齢者住宅で過ごすことを望んでおられる入居者が、病気の進行により終末期に入られた。家族も「本人の意向に沿って欲しい」というご希望もあり、高齢者住宅で最期を過ごすこととなった。

コロナ禍ということで面会禁止となっており、直接話すこと、顔を見ることが出来ない為、その方が何に喜ばれ、どんなことをして過ごしているのか、ご家族に伝える方法がないかと職員間で話し、「那人ノート」を作成。ケアに入った時の職員との会話、普段の様子など何気ないことを含めて、関わる職員みんなでノートに綴っていくことにした。現在も自職場だけでなく、デイサービスなど含め関係部署とも一緒にノートを埋めている。

人生の最期を迎えるその人やその家族にとって、とても大切で貴重な終末期に、コロナ禍で直接顔を見ることが出来ない状況が続いており、何か自分達に出来ることはないかと、その人や家族の思いに寄り添い考えることが出来た事例となった。

その人の思い、家族の思いを聞き、どのような形にしていくか、実践を通して考えることが出来た。

「当たり前の生活を」

社会福祉法人岡山中央福祉会 野代 愛美

【キーワード】連携 / 楽しみ / 自己選択

よろずやけんちゃんを始めたきっかけはユニット職員からの一言でした。中野けんせいえんでは施設に入居していても今までの生活を継続出来るように外出支援に力を入れ、楽しみ作りに取り組んできました。今まで当たり前に欲しいものを欲しい時に買いに行くことが出来ていましたが、コロナ禍により日常生活でさえも制限が強いられる年になりました。

よろずやけんちゃんではコロナ禍の影響でこれまで中野けんせいえんを象徴していた外出支援が出来なくなり、ご入居者にとって社会活動や自己選択ができる機会が減少しました。実際にコロナ禍以前は、穏やかに過ごされていた方も様々な制限により、今まで無かった行動がみられる事例もありました。その中で、ユニット職員から「日常的にご入居者に楽しんでもらえる企画を行いたい」との声から始まり、売店常設化に至りました。外出されなくともご入居者は選択する機会が増え喜ばれる姿が見られました。買い出し等はご入居者が好まれる物を聞き取りし、職員が当番制で担当し在庫の確保に努めました。売り上げは好調で回数を重ねるごとに定着もってきておりご入居者の生活の一部となりました。家具等は地域の方から頂いた物もあり、昔を懐かしめる環境となりました。



職員が代行して買い物に行く方法もありますが、やはりご入居者が直接目で見て選べる楽しみが増えることにより穏やかに過ごされる時間が増えました。コロナ禍でも出来る楽しみ作りとして買い物は一部分ではありますが、継続しつつ一日でも早くコロナ禍以前の生活が出来るように願っています。

全職員連携し、施設全体として何が出来るか考えることができました。



「利用者さんに笑顔になってもらいたい!!」

社会福祉法人備後の里 佐藤 優子

【キーワード】コロナ禍の行事 / 法人の対応と方針 / 実施方法

コロナ禍で外食や外出も制限され、何をするにも日常にコロナありきの生活になり、利用者の顔つきがなんだか険しく、なんだかモヤモヤがつる様子を感じていました。

感染対策を法人で決めていましたが、事業所や現場職員の間でも、実際の日々のかかわりの中で、どこまでがOKでNGなのか、制限しないといけないと思う人、コロナ禍でもどうにかできないかと思う人、それぞれ思いの違いがありました。

2020年の春、緊急事態宣言中、何が正解か分からぬながらも、小多機で、今後どうしていきたいのかを職員間で話し合いました。コロナへの不安、リスクはあるが、『利用者さんに笑顔でいて欲しい。小多機にいる時に多くの制限を感じてもらいたくない。美味しいものを食べてもらいたい。』という気持ちが多く、現状の室内行事を可能な限り減らさず対応することにしました。その事例を紹介します。

食事やおやつ作りは、手指の手洗いと消毒、マスクと手袋を着用し、生で摂取するものを極力控え、過熱しない食材は職員が管理し、利用者には加熱調理するものを切ったり混ぜたりしてもらうようにしました。しかし認知症の方も多く、マスク着用は當時全員ができない時もありました。

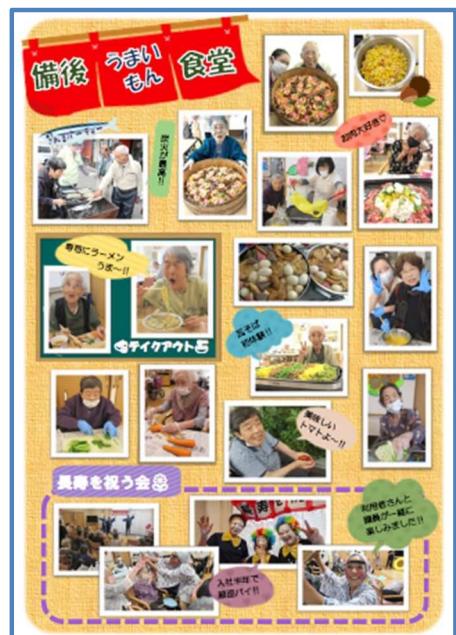
施設内では利用者のリクエストに答えて昼食を作り、時々はうどん、ラーメン、お寿司のテイクアウトを行うなどして、週1回程度で食事などの行事を企画しました。花見などのドライブも職員と利用者が2~3名ずつ回数を分けて行いました。

庭の一角に園芸スペースを作り、利用者と水やりや収穫をしました。家族の中には来所された際に、フロアから利用者へ見えるようにと、花や野菜の苗を持参して植えたり、草とりもしてくれま

した。季節によりいつも違う花や野菜が見られ、それを一緒に食べるなど、話題にすることもできました。職員が演芸など行う場合は、職員がその時だけマスクを外し、利用者へは必ずマスク着用してもらい、室内換気も徹底して開催をしました。

感染対策としては万全ではない部分も多かったが、利用者の希望を聞きながら、職員の『できることをしたい。楽しいことをしたい。』と言う気持ちがまとまってできたものだと思う。感染などがなかったとはいえ、今後の状況をみながら対応を修正する部分は改善し、行事開催を心配する声や慎重に考える意見も大切にしながら取り組みを継続していきたいです。

利用者から直接、「美味しかった、楽しかった」と喜んでもらえ、家族からも利用者が家でとても喜んで話をしてくれたと聞くこともあります。職員のやつて良かったという思いにつながっています。職員間でも温度差はありますが、コロナ禍を理由に色々なことについて、「やらない、しない選択肢」を安易にとらない方向性ができました。



「自宅で家族と一緒に」～コロナ禍での最期の時間～

社会福祉法人備後の里 佐藤 優子

【キーワード】家族の希望 / 看取り / 多職種連携

Bさんは高齢ながら自宅で長男と2人暮らし。福祉用具以外サービス利用はしていないが、徐々に2人暮らしに不安も感じられ、小規模多機能型居宅介護の利用を開始された。通いでは入浴、毎日の訪問で内服管理と配食を実施。長時間の離床や外出は疲れなどもあり、時々お休みしながらサービスを継続している。2020年12月頃から風邪気味や、しんどいと訴えが続き、通いを休むことが増えた。心臓の持病もあり、長男から『だんだん弱っている。今回が最後の正月になるかも知れん。おせちを準備して家族でゆっくりします。』と話があり、年始は電話で様子を伺うのみとなっていた。

2021年元旦の夕方、長男から『脈がとんで、声かけに反応がない。』と施設へ連絡があり、Bさんは救急搬送後に入院された。コロナの影響で面会条件も厳しく、家族もBさんへ会えない状況が続き、1週間ほど経過した頃には、Bさんは食事もとれず点滴対応となり、看取りの状態であると病院から説明がされ、家族からBさんを自宅へ連れて帰りたいと希望があった。

自宅での看取りについて、かかりつけ医に相談し、食事のとれない状況で点滴を継続的に行なうのか、病状などもふまえてカンファレンスし、在宅では点滴はせず、可能な限り経口摂取で対応して看取りをすることになった。

1月12日、Bさんは自宅へ戻られ、『Bさん、おかえりなさい。これから家族さんと一緒にですね。』と職員が声かけをすると、うっすら目をあけ、ぼそぼそと発語と笑顔がみられた。

毎日、昼に訪問看護、朝と夕方に小多機が訪問を実施した。各サービスの訪問状況は隨時ノート

で確認しながら、全身状態の確認、褥瘡ケア、排泄や口腔ケア、バイタル測定など行った。

自宅には長男、次男、長女がそろい、訪問時は必ず家族がそばにいて、その日のBさんの様子を職員と話ながら、水分で口を濡らしたり、スプーンでジュースなどを介助していただいた。

しかし、ほとんど水分摂取ができず、尿量も減り、熱発や反応もだんだん弱くなるBさんへ、「何もできなくてつらい」ともどかしさを感じる職員もいたが、Bさんへ声をかけ、家族との会話や体位変換、髪をとき、顔を拭き、口を湿らせ、ただただ目の前のことしかできなかった。

1月17日の明け方、Bさんは家族に見守られて亡くなり、最後に口を濡らしたのは、Bさんが好きだった長男の立てたお抹茶であった。

最期の時間を家族と一緒に過ごしたいというお子さんたちと、ずっと長男と家で過ごすことが当たり前だったBさんが、病院で一人で最期を迎えることないようにという気持ちに、多職種で対応できたのではないかと思う。

介護職員としてできることは、本当に少ないかもしれないが、現場で対応する職員それぞれの思いがある中で、目の前の利用者や、その家族に対してできるだけのことをしたいという行動が職員間で模索することができた。

「医療との連携でコロナ禍での不安に対応」

医療生活協同組合健文会 佐々木 広子

【キーワード】医療・介護の連携 / 多職種協働 / 感染対策

山口民医連の在宅介護福祉事業部（以下、事業部）では幸いなことに利用者や職員に新型コロナウイルス陽性者は発生していない。しかしながらいつ陽性者が発生してもおかしくないという危機感のもと、職員は不安を抱えながら勤務をしている。後方病院のICNと連携しながら対策をとった事例を報告する。

事業部では、2021年3月より新型コロナ感染予防対策マニュアルの作成に取り組んだ。その頃、新型コロナの陽性者は県内でもほとんどいない状況であったが、情報だけが錯綜し、職員は不安を感じていた。事業部では、厚労省の資料を参考に訪問系・通所系・入所施設の3パターンの作成に取り掛かった。実際にマニュアル作成に取り掛かると対策に確信がもてず「本当にこれでいいのかな。病院のICNに協力してもらいたいけど病院は在宅以上にコロナ対策で大変そうだし、今は頼めないな。」と思いながら取り組んでいた。マニュアルの骨子を作成し、看護部長を通してICNへの協力を依頼した。本当に忙しい時期であったと思うが、快く引き受けてもらえたことは心強かった。ICNと相談することで、きちんと対策をとれば介護や看護を継続できることに確信が持てた。地域の多くの事業所は県外から家族が移動した場合等、利用制限を掛けているが、当事業部では濃厚接触者にならない対策をとり、早くから利用制限はほとんどすることなく利用者の受け入れを行った。

BCPの作成は、ICNと連携をとり作成した。ICNより「私がPPEの着脱の学習会をしましょう」と提案があり、感染対策とPPE着脱の学習会を開催することができた。

今年度に入ってからは職員や利用者の家族が濃厚接触者になる症例が数例あったが、その都度

ICNと連携をとり、PCR検査の対応を迅速に行うことができたため、業務への影響を最小限にとどめることができた。クラスターが発生した他法人の病院から退院した利用者のデイサービスと訪問看護の依頼があった時は、デイサービスを利用制限し、デイサービスで行う予定であったケアを訪問看護がフル装備で代替・対応した。

まとめとして、①後方病院のICNと連携し、感染対策マニュアルやBCPの作成、学習会の開催を行うことができた。

②ICNと連携することで職員が新型コロナウイルスを怖がりすぎることなく、利用者のケアを継続することができた。

③新型コロナウイルス陽性者がいつ発生してもおかしくない状況であるため、情報をキャッチしたら迅速な対応を行い、利用者が困らないように法人全体で協力することが重要である。

コロナ禍というこれまでに体験したことがない状況であるが、医療と連携し、新型コロナ対策に取り組んだ。医療も介護も区別なく多職種協働で利用者の健康と生活を守ることの大切さを学ぶことができた。

「面会制限による家族の不安を軽減させるために」

公益社団法人福岡医療団 濱名 勇

【キーワード】面会制限 / 家族 / 不安



私の所属している療養病棟では、退院が難しく長期入院の患者が多くおられる。コロナによる面会制限の為、患者と面会ができないことでご家族からどのような様子か尋ねられる問い合わせが増えた。ご家族の不安等を少しでも軽減し、安心してもらうためにはどうすればよいか検討した事例を報告する。

【入院状況を電話でご家族に伝える】

当院ではオンライン面会等も行っているが、所属部署ではオンライン面会をするご家族は少なく、電話での問い合わせが多くかった。そこで現在の患者の状態をご家族に知ってもらう為、病棟からご家族へ電話をし、状態の説明をおこなった。ご家族からは「会うこともできず、心配だったので様子を聞くことができて良かった」等の言葉を頂けた。



【誕生日の患者のお祝いをしている写真を撮りご家族へお渡しする】



当病棟では患者の誕生月にスタッフから患者へ誕生日カードを渡すようになっていたが、患者だけでなくご家族へもお祝いをしている写真をお渡しす

る様にした。お渡し方法は、ご家族が物品等を病院に持つてこられた時に手渡しや郵送する等して行った。ご家族は写真ではあるが顔をみることができ喜ばれていた。

今回の取り組みを通して、ご家族の方からも感謝の声を頂くことができ、面会できないことでの不安軽減になったと思われる。また、ご家族から

感謝の言葉を聞くことでスタッフのモチベーション向上にも繋がったと思われる。

コロナ禍でこれまでのように患者と家族が会うことができない状況に対し、少しでも患者や家族に安心してもらえるように何かできることはないかと考えることで、患者や家族に寄り添うという意識を向上することができた。この取り組みを通して、少しでも患者と家族が離ればなれに感じないようになってくれれば良いと思う。民医連の介護・福祉の理念の3つの視点である「利用者と介護者、専門職、地域との共同のいとなみの視点をつらぬきます」にあたるものだと感じた。



「コロナ禍で入居者とご家族の関り」

社会福祉法人くまもと福祉会 益永 武士

【キーワード】面会方針 / 連携 / 情報発信

新型コロナウイルス感染症の感染拡大対策として、2020年3月末より面会禁止を実施し、リスクレベルに応じて面会内容を変更してきた。定期的に面会に来られるご家族が長期にわたり面会が制限される中で、入居者等も一時的な意欲の低下等が見られる方もおられた。コロナ過における面会の取り組みと日々の様子をご家族に情報発信をする取り組みを報告する。

【事例①面会の環境調整】

リスクレベル（1～2）：居室内で30分の面会。ご家族にとって時間は短いが一番喜ばれた面会であった。職員にとっても負担が少なく対応できた。

リスクレベル（3）：別室で仕切り越しの10分面会。対応当初はガラス越しや通用口の入り口で面会を実施。顔しか見えない状況で会話もできなかつたが職員が間に入り支援を行った。会話ができない不自由さもあって、透明ビニールで作った仕切り越しの面会に変更し、会話が出来るようになりご家族も喜んで頂けた。担当職員が付き添い日々の暮らしの情報を発信した。面会日時の調整が大変で事務職員が窓口となって対応していただいた。

リスクレベル(4～5)：タブレットの20分面会。リスクレベル4～5が多く、面会中止で対応していたが、タブレット面会も2021年4月より職員付き添いで実施した。予約を含め、タブレット移動など事務職・専門職協力で対応した。

コロナ過における看取りでは、ご家族が安心して看取りが行えるように実施し、居室の変更や面会時間の調整をして、ご家族と話し合いができる環境調整を行った。

【事例②暮らし情報発信】

担当職員による活動写真や手紙を毎月送付し、ご家族からは「元気な様子で安心です」等の返事が聞かれる。怪我や身体状況変化時は随時電話連絡し、内容を報告している。

特養生活においてご家族や知人との触れ合いは入居されている方にとって社会とのつながりを感じさせる幸福の一部である。コロナ感染症により、家族等の身近な人との面会制限は入居者にとって心身に悪影響を及ぼす原因になると思われる。面会制限を通じて改めてご家族との関わりの必要性を強く感じた。

暮らしの情報発信についてはコロナ禍で外からの様子が見えにくい施設空間であるため、活動・状況報告はご家族にとって精神的負担が軽減することにつながったと思う。

コロナ禍における面会について入居者やご家族が安心して施設生活が送られるように協議して実施し、ご家族が安心して生活が送られるように施設から情報発信して負担軽減に努めた。また、些細な事故もご家族に報告することにより信頼関係が構築できた。

「コロナ禍で工夫した介護老人保健施設での施設内行事の取り組み」

奄美医療生活協同組合 中里 幸恵

【キーワード】コロナ禍でもできること / 楽しみ、喜び / 多職種協働

例年なら利用者さまやその家族さま、地域の方々との交流企画として、季節ごとの年間行事を施設で企画し開催していましたが、この約2年間、コロナ禍により集団で集まることが出来ず、今年度の夏祭りも中止となりました。代替え企画として、感染に留意しながら工夫して楽しめる方法として何が出来ないか、と職員で検討した事例を報告します。

感染対策に留意し、規模を縮小して『夕涼み会』を計画しました。(夕食後に、施設の職員が屋台を催し、入所者さまに屋台を楽しんでもらう)。夏祭りのような雰囲気が出る提灯の飾りなど施設内に飾りつけ、雰囲気づくりにも力を注ぎました。しかし、実際は、当日午前に地域でのコロナ感染者が発生したため、夕涼み会も実施できませんでした。しかし、楽しみにしていた入所者さまを見て、職員から「勤務している職員だけでも、午後のレクリエーションの時間を使って実施したい」と話しがあり、急遽、時間を変更し、施設内で協力を得られる他職種職員にも声掛けをして、かき氷や綿あめなど、夏祭りを小規模な形で実施した。

小規模でも季節行事を行うことで職員、利用者さまとの交流ができました。また、季節を感じさせる行事だったこともあり、利用者さまの笑顔がたくさんみられ、職員も「何とか実施してあげたい」と協力して行きました。

コロナ禍のようにどのような状況であっても、利用者さまが生活の中に楽しみや喜びを感じられるような機会を多職種で検討して実施することが出来ました。

「地域の通所事業所における新型コロナ感染症発生時に おけるケアマネジメント」

鹿児島医療生活協同組合 阿久根 平

【キーワード】多職種協働 / 連携 / 人権

地域の（県連外の）通所介護事業所で職員が新型コロナウイルス感染症を発症した。急な事業中止により利用者の生活に支障をきたさないように、事業所内で随時会議を開催し情報共有を行った事例を報告する。

まん延防止等重点措置期間において、I 通所事業所で合計 2 名の新型コロナウイルス感染症陽性者が出了。I 通所事業所は行政と連携しながら、現状を真摯に受け止め、情報を正確に随時、ケアマネジャー側へ提供していた。

当事業所内で、I 通所事業所を計画に位置付けていた利用者は 10 名以上おり、担当ケアマネジャーが状況把握に努め、院所管理部及び法人本部と随時情報を共有した。また、I 通所事業所が誹謗中傷の対象にならないように情報管理に努め、サービス休止期間中の利用者の生活や、介護面（入浴、機能訓練、その他の介護体制等）に支障をきたさないように、利用者本人や家族と電話面接を繰り返し実施した。I 事業所の職員全員と、接触のあった利用者全員に PCR 検査が実施され、利用者 1 名が濃厚接触者と認定された。併用して利用しているサービス事業者との連携も図り、代替サービスや家族ケア等の調整を行うとともに、利用者家族の心理的サポートを行った。管理者は院所管理部・感染委員会及び法人本部との連携を図り、担当ケアマネジャーの動きを把握しつつ、心理的サポートを行った。

I 事業所は約 3 週間のサービス休止期間を経て、サービスが再開できた。密な連携と適切なケアマネジメントにより、クラスター化せず、利用者家

族、事業者ともに最小限の影響にとどめることができた。

日頃から事業所間の信頼関係及び職員の人権意識、感染対策が徹底されており、新型コロナウイルス感染症の陽性者が出ても、連携に溝が入ることなくケアマネジメントを遂行できた。家族は一時的に介護の負担を強いられることになったが、期間が短かったことから、利用者の機能低下やその後の生活への支障はなかった。利用者同士や地域での誹謗中傷なども発生しなかった。組織的な動きにより、担当するケアマネジャーの心理的負担も最小限にとどめられた。

新型コロナウイルス感染症による風評被害や誹謗中傷等への配慮をするうえで、利用者の実態や生活状況の把握に努め、過敏な対応による状況の複雑化やサービス休止期間の延長を避けることができた。また、担当ケアマネジャー間の情報共有を随時行ったことで、その利用者の生活状況に合わせたサービス調整を行うことができた。

「困ったときこそ訪問介護！」～利用者の生活と権利を守るために～

鹿児島医療生活協同組合 森 梓

【キーワード】多職種連携 / 専門性 / 質

外部の通所サービス等でクラスターが発生し、全ての職員と利用者が濃厚接触者となり、関係する通所及び入所サービスが一時休止した。

【事例】

通所サービスを利用していたA氏も濃厚接触者となり、PCR検査を受け自宅待機となった。A氏は通所サービスで入浴支援を受けており、休止となつたことで入浴や保清面のケアが困難となつた。

PCR検査の結果が陰性であることと、その他の健康状態に問題がないことを確認し、担当ケアマネジャーと連携を図り、自宅内で訪問介護による入浴サービスを追加し支援を行うこととなつた。

開始前は、自宅が入浴できる浴室環境であるかの確認を行つた。また、歩行困難な方であったため、車椅子やシャワーチェア等が揃つてゐるかを確認し、通所サービスが休止の期間中は特定の職員に限定して訪問を実施した。

ショートステイを利用していたB氏も、ショートステイ側より利用のお断りがあり、自宅へ帰ることとなつた。

寝たきり状態で、日常生活全般において介護を必要とするだけでなく、医療的ケア（喀痰吸引、経管栄養）も要する方であったため、家族の不安や負担が増える問題が生じた。

訪問看護と訪問介護にて連日複数回のサービス導入を行い、ヘルパーの有資格者も医療的ケアを実践し、B氏と家族が自宅でも安心して過ごせる環境を整えた。

医療的ケアの有資格者を確保できていたことで、専門的な介護・福祉の実践に取り組むことができた。

誰もが平等に与えられた尊厳や権利は、コロナ禍によって奪われつつある。通所系や入所系のサービス利用が困難となつた方でも、今自分たちに実践できることを職員同士で考え個別性を追求した結果、利用者の生活を守ることにつながつた。

第44期 全日本民医連 介護職委員会

介護職委員会委員長 門脇 めぐみ 千葉／社会福祉法人千葉勤労者福祉会

介護職委員会委員 山口 とよ子 長野／上伊那医療生活協同組合
西島 龍樹 北海道／社会福祉法人勤医協福祉会
森高 義之 埼玉／医療生協さいたま生活協同組合
金野 昭嗣 東京／社会医療法人社団健友会
中野 一仁 東京／社会福祉法人すこやか福祉会
山崎 翔 神奈川／川崎医療生活協同組合
藤岡 真帆 京都／医療法人葵会
福山 祐輔 大阪／社会医療法人同仁会
田副 大輔 高知／高知医療生活協同組合

全日本民医連事務局次長 林 泰則

事務局 高梨 達矢
瀧澤 大貴

2022年2月作成

